

に、長き枝を葺きさしたれば、ただ卯の花がさねを、こしに懸けたるやうにぞ見えける。供なるをのこども、いみじう笑ひつゝ、網代をさへつきうがちつゝ、こゝまだしまだしとさし集むなり。「人も逢はなむ」と思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。

近う來ぬれば、さりともいとかうてやまむやは、この車のさまをだに、人に語らせてこそやまめとて、一條殿のもとにとどめて、「侍從殿やおはす。時鳥の聲聞きて、今なむかへり侍る」といはせたる。使「侍從」只今まゐる。あが君く」となむの給へる。さぶらひにまひろげて、指貫奉りつ」といふに、待つべきにもあらずとて、はしらせて、土御門さまへやらするに、いつのまにか装束しつらむ、帯は道のまゝにゆひて 侍從「しばし／＼」と追ひくる。供に、侍、雑色、物はかではしるめる。「とくやれ」とい

いそがして、土御門にきつきぬるにぞ、あへぎ惑ひておはして、まづこの車のさまを、いみじく笑ひ給ふ。侍從「うつゝの人の乗りたるとなむ更に見えぬ。なほおりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人ども、興じ笑ふ。侍從「歌はいかにか。それ聞かむ」との給へば、清「今御前に御覽せさせてこそは」などいふほどに、雨まことに降りぬ。侍從「などかこと御門のやうにあらで、この土御門しも、うへもなく造りそめけむと、今日こそいとにくけれ」などいひて、侍從「いかで歸らむずらむ。こなたさまは、たゞ後れじと思ひつるに、人目も知らずはしられつるを、あゝ往かむこそいとすさまじけれ」とのたまへば、清「いざ給へかし、うちへ」などいふ。侍從「それも烏帽子にてはいかでか」清「とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なきをのこども、唯ひきにひき入れつ。一條よりかさをもてきたるをさへせて、うち見返りうち見返り、この度はゆる／＼と物うげにて、

卯の花ばかりを取りおはするもをかし。

さて参りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。怨みつる人々、ゑじ心うがりながら、藤侍従、一條の大路はしりつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。宮「さていづら、歌は」と問はせ給ふ。かうくと啓すれば、宮「くちをしのことや。うへ人などの聞かむに、いかでかをかしきなくてあらむ。その聞きつらむ所にて、ふところそよまゝしか。あまりぎしき事さめつらむぞあやしきや。こゝにてもよめ。いふかひなし」などの給はすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合はせなどする程に、藤侍従の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄様に、

ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

かへしまつらむなど、局へ硯とり遣れば、宮「唯これしてとくいへ」とて、御硯の蓋に、紙など入れて賜はせられたれば、清「宰相の君書き給へ」とい

ふを、宰相「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、かみもおどろくしく鳴りたれば、物も覺えず、唯おそろしきに、御格子まわり渡しまどひし程に、歌の返ごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少しやむ程はくらくなりぬ。只今なほその御返ごと奉らむとて、取りかゝる程に、人々、上達部など、かみの事申しにまわり給ひつれば、西おもてに出でて、物など聞ゆる程にまぎれぬ。人はたさして得たらむ人こそ知らめとて止みぬ。大かたこの事にすぐせなき日なりとうじて、清「今はいかでさなむ往きたりしとだに、人に聞かせじ」などぞ笑ふを、宮「今もなど、それ往きたりし人どものいはざらむ。されども、させじと思ふにこそあらめ」と、物しげに思しめしたるもいとをかし。清「されど今は、すさまじくなりにて侍るなり」と申す。清「すさまじかるべきことかは」などの給はせしかど、さてやみにき。

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに宰相の君「いかにぞ、手づから折りたるといひし下蔵は」との給ふを聞かせ給ひて、宮「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

したわらびこそこひしかりけれ

と書かせ給ひて、「もといへ」と仰せらるゝもをかし。

ほとゝぎすたづねてきし聲よりも

と書きて参らせられたれば、宮「いみじううけぱりたりや。かうまでだに、いかで時鳥の事をかけつらむ」と笑はせ給ふもはづかしながら、清「何か。この歌すべて詠み侍らじとなむ思ひ侍るものを。物のをりなど人のよみ侍るにも、「よめ」など仰せらるれば、えさぶらふまじき心地なむし侍る。いかでかは、文字の數知らず。春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のをりは菊などをよむ事は侍らむ。されど歌よむといはれ侍りしすゑは、

すこし人にまさりて、「そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへど、それが子なれば」などいはれたらむこそ、かひある心地し侍らめ。つゆ取り分きたるかたもなくて、さすがに歌がましく、我はと思へるさまに、さいそに詠み出で侍らむなむ、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、中宮「さらばたゞ心にまかす。我は詠めともいはじ」との給はすれば、いと心やすくなりぬ。

「今は歌の事、思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申させ給ひて、内大臣殿、いみじう心まうけさせ給へり。夜うち更くるほどに、題いだして、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがしいだすに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓しなど、ことをのみいふを、大臣御覽して、「などか歌はよまではなれ居たる。題とれ」との給ふを、清「さる事承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」大臣「ことやうなる事。

まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よしこと時は知らず、今宵はよめ」など責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れでさぶらふに、こと人ども詠みいだして、よしあしなど定めらるゝ程に、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

元輔がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば、「何事ぞく」と大臣ものたまふ。

清「その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよまゝし

つゝむ事さぶらはずは、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と

啓しつ。(第八十六段)

## 方 弘 は

方弘マコラウは、いみじく人に笑はるゝものかな。親などいかに聞くらむ。供にありくものどもの、いと人々しきを呼びよせて、人々「何しにかゝる者に使はるゝぞ。いかゞ覺ゆる」など突ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへのきぬなども、人よりはよくて着たるを、人々「これはこと人に着せばや」などいふよ。げにぞ詞づかひなどのあやしき。里に宿直物取りにやるに、方弘をのこ二人まかれ」といふに、男「一人して取りにまかりなむものを」といふに、方弘「あやしの男や。一人して二人の物をば、いかで持つべきぞ。一升瓶に、二升は入るや」といふをなでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて、「御返ごととく」といふを、方弘「あなにくの男や。竈に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかく

したるぞ。飯、酒ならばこそほしうして、人の盗まめ」といふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は、誰々かありつる」と人の問へば、方弘「それかれ」など四五人ばかりいふに、「又は」と問へば、方弘「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、亦あやしき事にこそはあらめ。人間に寄りきて、方弘「わが君こそまづ物きこえむ。まづ／＼人の宣へる事ぞ」といへば、清「何事にか」とて、几帳のもとによりたれば、「むくろごめにより給へ」といふを、「五體ごめに」となむいひつる」といひて、また笑ふ。除目のなかの夜さし油するに、燈臺の打敷を踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺はたふれぬ。襪は打敷につきてゆくに、まことに道こそしんどうしたりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に人もつかず。それに方弘は、豆一盛を取りて、小障子のうしろ

にて、やをら食ひければ、ひきあらはして笑ふことぞ限なきや。(第九十四段)

### 心もごなきもの

心もとなきもの、人の許に、とみの物ぬひにやりて待つほど。物見にいそぎ出でて、今や／＼とくるしう居入りつつ、あなたをまもらへたる心ち。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より、思ふ人の文を得て、かたく封じたる續飯など放ちあくる心もとなし。物見にいそぎ出でて、「事なりにけり」とて、白き筥など見つけたるに、近くやり寄するほどわびしう、おりてもいぬべき心ちこそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたるちごの、五十日、百日などのほどになりたる、行末いと心もとなし。とみの物縫ふ

に、くらきをり針に絲つくる。されど、我はさるものにて、ありぬべき所をとらへて、人につけさするに、それも急げばにやあらむ、とみにもえさし入れぬを「いで只なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひ顔にえ去らぬは、にくささへ添ひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行くをり、まづわがさるべき所へ行くとして、只今おこせむとて出でぬる車待つほどこそ心もとなけれ。大路いきけるを、さなりけると喜びたれば、外さまにいぬる、いとくちをし。まして物見に出でむとてあるに、「事はなりぬらむ」などいふを聞くこそわびしけれ。子うみける人の、後のこと久しき。物見に、また御寺まうでなどに、もろ共にあるべき人を乗せにいきたるを、車さし寄せたてるが、とみにも乗らで待たするも、いと心もとなく、うち棄ててもいぬべき心ちする。とみに炒炭おこす、いとひさし。人の歌の返しとくすべきを、え詠み得ぬほど、いと心もとなし。懸想人などはさしも急ぐま

じけれど、あのづから又、さるべき折もあり。又まして女も男も、たゞにいひおはすほどは、ときのみこそはと思ふほどに、あへなく僻事も出でくるぞかし。又、心ちあしく、物おそろしき程、夜の明くる待つこそ、いみじう心もとなけれ、また齒黒めのひる程も心もとなし。(第百四十一段)

## うれしきもの

うれしきものまだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり棄てたる文を見るに、同じつゞきあまた見つけたる。いかならむと思ふ夢を見て、おそろしと胸つぶるゝに、ことにもあらず合はせなどしたる、いとうれし。よき人の御前に、人人數多さぶらふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、語らせ給ふを、我に御覽じ合

はせての給はせ、いひ聞かせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなし都の内ながら、身にやむごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかにいかにおぼつかなく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やむごとなき人などの、くち惜しからぬものに思しの給ふ。物の折、もしは人といひかはしたる歌の聞えてほめられ、打聞などに書き入れらるる。みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、なほ思ひやらるゝよ。

いたううち解けたらぬ人のいひたるふるきことの知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて見つけたるはをかしう、只これにこそありけれど、かのいひたりし人ぞをかしき。みちのくに紙、白き色紙、たゞのも、白う清きは、得たるもうれし。はづかしき人の歌の本末問ひたるに、ふと覺えたる、我ながらうれし。常にはおぼゆる事も、また人の問ふ

には、きよく忘れてやみぬる折ぞ多かる。とみに物もとむるに見出でたる。只今見るべき文などをもとめ失ひて、よろづの物をかへすゝ見たるに、捜し出でたる、いとうれし。物あはせ、何くれといどむ事に勝ちたる、いかでか嬉しからざらむ。又、いみじう我はと思ひて、したり顔なる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたふは必ずせむずらむと、常に心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬさまにて、たゆめすぐすもをかし。にくき者き者のあしきめ見るも、罪は得らむと思ひながらうれし。刺櫛すらせたるにをかしげなるも、またうれし。思ふ人のうへは、わが身よりも勝りてうれし。御前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、すこし遠き柱のもとなどに居たるを御覽じつけて、宮「こちこ」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。(第二百三十五段)

## 源氏物語

## 桐 壺

いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、勝れてときめき給ふありけり。初めよりわれはと思ひあがり給へる御かたへ、めざましきものに貶しめ嫉みたまふ。同じほど、それより下臈の更衣たちは、まして安からず、朝夕の宮仕につけても、人の心をのみうごかし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、ものごころぼそげに、里がちなるを、いよく飽かず憐れなるものにおもほして、人の譏をもえ憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。上達部上人なども、あいなく目をそばめつゝ、いと目

映き人の御おぼえなり。唐土にも、かゝることの起りにこそ、世も亂れ悪しかりけれと、やう／＼天の下にも、あぢきなる人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべうなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへの類なきを頼にて、交らひ給ふ。

父の大納言はなくなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御かたへにも劣らず、何事の儀式をももてなし給ひけれど、とりたてゝはか／＼しき御後見しなければ、ことある時は、なほ據所なくこゝろぼそげなり。前の世にも御契や深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覽するに、珍らかなる兒の御かたちなり。一の御子は右大臣の女御の御腹にて、よせおもく、疑なき儲君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御匂には並び給ふべくもあらざりけ



れば、大方のやむごとなき御おもひにて、この君をば私物におもほしかし  
づき給ふこと限なし。母君、初めよりおしなべての上宮仕したまふべき際  
にはあらざりき。覺えいとやむごとなく上ずめかしけれど、わりなく纏  
はさせ給ふあまりに、さるべき御遊のをり／＼、何事にもゆるある事のふ  
しくには、まづ參う上らせ給ふ。ある時は大殿籠り過して、やがてさぶ  
らはせ給ひなど、あながちに御前去らず、もてなさせ給ひし程に、おのづ  
から輕きかたにも見えしを、この御子生れ給ひて後は、いと心ことにおも  
ほしおきてたれば、坊にもようせずば、この御子の居給ふべきなめりと、  
一の御子の女御は思し疑へり。人より先に參り給ひて、やむごとなき御思  
なべてならず、御子たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみ  
ぞ、なほ煩はしく心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。

畏き御蔭をば頼み聞えながら、貶しめ疵を求め給ふ人は多く、わが身は

かよわくものはかなきありさまにて、なかなかなる物思をぞし給ふ。御局  
は桐壺なり。數多の御かたがたを過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前わたり  
に、人の御心をつくし給ふも、實にことわりと見えたり。參う上り給ふに  
も、あまりうちしきる折々は、うちはし、渡殿、此處彼處の道に怪しきわざ  
をしつゝ、御送迎の人の衣の裾、堪へがたうまさなきことゞもあり。また  
或時は、えさらぬ馬道の戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はし  
たなめ煩はせ給ふ時も多かり。事に觸れて數知らず苦しき事のみまされ  
ば、いといたう思ひわびたるを、いとゞあはれと御覽じて、後涼殿こうりやうにもと  
より侍ひ給ふ更衣の曹司を、外に移させ給ひて、うへ局にたまはす。その  
恨、ましてやらむかたなし。この御子三つになり給ふ年、御袴着の事、一  
の宮の奉りしに劣らず、内藏寮、納殿の物を盡くして、いみじうせさせ給  
ふ。それにつけても、世の譏のみ多かれど、この御子のあよすけもておは

する御かたち心ばへ、ありがたく珍らしきまで見え給ふを、え嫉みあへ給はず。物の心知り給ふ人は、かゝる人も、世に出でおはするものなりけりと、あさましきまで、目を驚かし給ふ。

その年の夏、御息所はかなき心地に煩ひて、まかでなんとし給ふを、暇さらに許させ給はず、年頃常のあつしさになり給へれば、御目馴れて、「なほしばし試みよ」とのみのたまはするに、日々におもひ給ひて、たゞ五六日の程に、いと弱うなれば、母君泣く／＼奏して、まかでさせ奉り給ふ。かゝる折にも、あるまじき耻もこそ、と心づかひして、御子をばとゞめ奉りて、忍びてぞ出で給ふ。限あれば、さのみもえ留めさせ給はず、御覽じだに送らぬ覺束なさを、いふ方なく思さる。いと匂ひやかに美しげなる人の、いたう面瘦せて、いとあはれと物を思ひしみながら、言に出で、も聞えやらず、あるかなきかに消え入りつゝ、ものし給ふを御覽するに、來し方

行く末思しめされず、よろづの事を、泣く／＼契りのたまはすれど、御いらへもえ聞え給はず、まみなどもいとたゆげにて、いとゞなよ／＼と、われかの氣色にて臥したれば、いかさまにかと思し召し惑はる。輦車こしぐるまの宣旨などのたまはしても、また入らせ給ひては、更にあ許させ給はず。「限あらむ道にも後れ先だたじ、と契らせ給ひけるを、さりとも、うち捨て、はえ行きやらじ」とのたまはするを、女もいとみじと見奉りて、

「かぎりとして別る、道のかなしきにかまほしきは命なりけり」とかく思ふ給へましかば」と、息も絶えつゝ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覽じはてむと思し召すに、今日始むべき祈禱ども、さるべき人々うけ給はれる、「今宵より」と聞え急がせば、わりなくおもほしながら、まかでさせ給ひつ。御胸のみつと塞がりて、つゆまどろまれず、明しかねさせ

給ふ。御使の行きかふほどもなきに、なほいぶせさを限なくのたまはせつるを、「夜中うち過ぐる程になむ、絶えはてたまひぬる」とて、泣き騒げば、御使もいとあへなくて歸り参りぬ。聞し召す御心まどひ、何事も思し召しわかれず、籠りおはします。御子はかくてもいと御覽ぜまほしけれど、かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。何事かあらむともおもほしたらず、侍ふ人々の泣き惑ひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、怪しと見奉り給へるを、よろしきことだに、かゝる別の悲しからぬはなきわざなるを、まして哀にいふかひなし。

限あれば、例の作法にをさめ奉るを、母北の方、おなじ煙にもほりなむ、と泣きこがれ給ひて、御送の女房の車に慕ひ乗り給ひて、愛宕といふところに、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかにばかりかはありけむ。「空しき御骸をみるく、なほおはするものと思ふ

が、いとかひなければ、灰になり給はむを見奉りて、今はなき人と、ひたぶるに思ひなりなむ」と、さかしうのたまひつれど、車よりおちぬべう惑ひ給へば、「さは思ひつかし」と、人々もてわづらひ聞ゆ。内裏より御使あり、三位の位おくり給ふよし、勅使来て、その宣命讀むなむ、悲しきことなりける。女御とだにいはずなりぬるが、飽かずくちをしう思さるれば、今一階の位をだにと贈らせ給ふなりけり。これにつけても、憎み給ふ人々多かり。物思知り給ふは、さまかたちなどのめでたかりしこと、心ばせのなだらかにめやすく、憎みがたかりしことなど、今ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなし故こそ、すげなう嫉み給ひしか、人がらのあはれに情ありし御心を、うへの女房なども戀ひ忍びあへり。「なくてぞ」とは、かゝる折にや、と見えたり。はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにも、こまかに訪はせ給ふ。ほど経るまゝに、せん方なう悲しう思さるゝに、御か

たゞの御宿直なども、絶えてし給はず、たゞ涙にひぢて、明し暮させ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。「なき跡まで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ弘徽殿などには、なほゆるしなうのにまひける。一の宮を見奉らせ給ふにも、若宮の御戀しさのみおもほし出でつゝ、親しき女房、御乳母などを遣しつゝ、有様を聞き召す。

野分だちて、俄に膚寒き夕暮の程、常よりも思し出づる事多くて、靱負の命婦といふを遣す。夕月夜のをかしき程に、いだし立てさせ給ひて、やがてながめおはします。かうやうの折は、御遊などせさせ給ひしに、心ことなる物の音を聞き鳴らし、はかなく聞え出づる言の葉も、人よりは異なりしけはひ、かたちの、面影につとそひて、思さるゝも、闇のうつゝにはなほ劣りけり。命婦かしこにまかで着きて、門ひき入るゝより、けはひあはれなり。やもめずみなれど、人ひとりの御かしづきに、とかくつくろひ立

て、めやすき程にて過し給へるを、やみにくれてふししづみ給へる程に、草もたかくなり、野分にいとゞ荒れたる心地して、月かげばかりぞ、八重葎にもさはらずさし入りたる。南面におろして、母君とみにえ物ものたまはず、「今までとまり侍るが、いと憂きを、かゝる御使の蓬生の露分け入り給ふにつけても、はづかしうなむ」とて、實にえ堪ふまじく泣い給ふ。「参りてはいとど心ぐるしう心肝も盡くるやうになむ」と典侍ねんじの奏し給ひしを、物思ひ給へ知らぬ心地にも、實にこそいと忍びがたう侍りけれ」とて、ややためらひて、仰言傳へ聞ゆ。「しばしは夢かとのみたどられしを、やう／＼思ひしづまるにしも、さむべき方なく、堪へがたきは、いかにすべきわざにか、とも問ひあはすべき人だになきを、忍びては参り給ひなむや。若宮のいとおぼつかなく、露けき中に過し給ふも、心ぐるしう思さるゝを、とく参り給へ」など、はか／＼しうものたまはせやらす、咽せ

かへらせ給ひつつ、かつは人も心弱く見奉るらむ、と思しつゝまぬにしもあらぬ御氣色の、心ぐるしさに、承はりも果てぬやうにてなむ、退出侍りぬる」とて、御文奉る。「目も見え侍らぬに、かく畏き仰事を光にてなむ」とて見給ふ。「程経ば、すこしうちまざるゝこともやと、待ち過す月日に添へて、いと忍びがたきは、わりなきわざになむ。いはけなき人も、いかにも思ひやりつゝ、諸共にはぐくまぬおぼつかなさを、今はなほ昔のかたみになずらへて、ものし給へ」など、こまやかに書かせ給へり。

宮城野の露ふきむすぶ風の音に小萩がもとをおもひこそやれとあれど、え見給ひはせず。「命長さのいとつらう思ひ給へしらるゝに、松の思はむことだにはづかしう思ひ給へ侍れば、百敷に行きかひ侍らむとは、ましていとばかり多くなむ。畏き仰事をたび／＼承はりながら、みづからはえなむ思ひ給へたつまじき。若宮はいかにおもほししるにか、參

り給はむことをのみなむ思し急ぐめれば、道理に悲しう見奉り侍るなど内々に思ひ給ふるさまを奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば、かくておはしますも、いま／＼しうかたじけなく」などのたまふ。「宮は大殿籠りにけり。見奉りて、委しう御有様も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。「くれ惑ふ心のやみも、堪へ難き片端をだに、はるくばかりに聞えまほしう侍るを、わたくしにも心のどかにまかたまへ、年ごろ嬉しくおもだたしきついでにのみ、たちより給ひしものをかゝる御消息にて見奉る、かへす／＼つれなき命にも侍るかな。生れし時より、思ふ心ありし人にて、故大納言、いまはとなるまで、「たゞこの人の宮仕の本意、必ず遂げさせ奉れ、我なくなりぬとて、くち惜しう思ひくづぼるな」とかへす／＼いさめ置かれ侍りしかば、はかばかしう後見思ふ人なき交らひは、なか／＼なるべきことゝ思ひ給へながら、たゞかの遺言

を違へじとばかりに、出したて侍りしを、身にあまるまでの御志の、よろづにかたじけなきに、人げなき恥をかくしつゝ、交らひ給ふめりつるを、人のそねみの深くつもり、安からぬこと多くなりそひ侍るに、よこさまなるやうにて、つひにかくなり侍りぬれば、かへりてはつらくなむ、かしこき御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき心の闇になむ」と、いひもやらず、むせかへり給ふ程に、夜も更けぬ。「うへもしかなむ。「わが御心ながら、あながちに人目驚くばかり思されしも、長かるまじきなりけり、と今はつらかりける人の契になむ。世にいさゝかも、人の心をまげたることはあらじと思ふを、たゞこの人ゆゑにて、あまたさるまじき人の恨を負ひはて／＼は、かううち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人わろくかたくなになりはつるも、前の世ゆかしうなむ」とうち返しつゝ、御しほたれがちにのみおはします」と語りてつきせず。なく／＼、「夜いたう更

けぬれば、今宵過さず御かへり奏せむ」と急ぎ参る。月はいり方の空清う澄み渡れるに、風いと涼しく吹きて、叢の虫のこゑ／＼催し顔なるも、いとたち離れにくき草のもとなり。

鈴虫のこゑのかぎりをつくしても長き夜あかずふるなみだかな  
えも乗りやらず。

「いとどしく虫の音しげきあさぢふに露おきそふる雲のうへびと  
かごとも聞えつべくなむ」といはせ給ふ。をかしき御贈物などあるべき折にもあらねば、たゞかの御かたみにとて、かゝるようもやと残しおき給へりける、御装束一領、御髪上の調度めく物添へ給ふ。若き人々悲しきことは、更にもいはず、内裏あたりを朝夕にならひて、いとさう／＼しく、うへの御有様など思ひ出で聞ゆれば、とく参り給はむことをそのかし聞ゆれど、かくいま／＼しき身の添ひ奉らむも、いと人ぎき憂かるべし、また

見奉らでしばしもあらむは、いと後めたう思ひ聞え給ひて、すがくとも  
え參らせ奉り給はぬなりけり。

命婦はまだ大殿籠らせ給はざりけるを、哀に見奉る。御前の壺前栽のい  
と面白き盛なるを御覽するやうにて、忍びやかに心にくき限の女房四五人  
侍はせ給ひて、御物語せさせ給ふなりけり。この頃且暮御覽する長恨歌の  
御繪、亭子院ていじのいんの書かせ給ひて、伊勢貫之によませ給へる大和言の葉をも、  
唐土の詩をも、ただそのすぢをぞ、まくらごととにせさせ給ふ。いとこまや  
かに有様を問はせ給ふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御かへり御  
覽すれば、「いともかしこきは、置きどころも侍らず、かゝる仰言につけて  
も、かきくらすみだり心地になむ。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより小萩がうへぞしづごころなき」

などやうに亂りがはしきを、心をさめざりける程と御覽じゆるすべし。い  
とかうしも見えじと思ししづむれど、更にえ忍びあへさせ給はず、御覽じ  
始めし年月のことさへ、かき集め、よろづに思しつづけられて、時の間も  
おぼつかかりしを、かくても月日は經にけり、とあさましう思し召さ  
る。「故大納言の遺言あやまたず、宮仕の本意ふかくものしたりし悦びは、  
かひあるさまにとこそ思ひわたりつれ。いふかひなしや」とうちのたまは  
せて、いとあはれにおぼしやる。「かくてもおのづから、若宮など生ひ出  
で給はば、さるべきついでもありなむ、命長くところ思ひ念ぜぬ」などの  
たまはす。かの贈物御覽せさす。なき人のすみか尋ね出でたりけむ、しる  
しの釵ならましかば、とおもほすも、いとかひなし。

尋ねゆくまぼろしもがな傳にても魂のありかをそことしるべく

繪に書ける楊貴妃のかたちは、いみじき繪師といへども、筆かぎりあり  
ければ、いとにほひすくなし。太液の芙蓉、未央びやうの柳も、氣にかよひたり

しかたちを、唐めいたる粧は、うるはしうこそありけめ。なつかしうらうたげなりしを思し出づるに、花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。朝夕の言種に、羽をならべ枝をかはさむ、と契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ、盡きせずらめしき。風の音、虫の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに、弘徽殿には、久しううへの御局にも參う上り給はず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊をぞし給ふなる。いとすさまじうものしと聞し召す。この頃の御氣色を見奉る上人女房などは、かたはらいたしと聞きけり。いとおし立ち、かどくしきところものし給ふ御方にて、こともあらず思し消ちて、もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

雲のうへもなみだにくるゝ秋の月いかですむらむ淺茅生の宿

おぼしやりつゝ、燈火をかゝげつくして、起きおはします。右近の司の宿直奏とのみまうしのこゑ聞ゆるは、丑になりぬるなるべし。人目を思して、夜御殿に

入らせ給ひても、まどろませ給ふことかたし。朝に起きさせ給ふとても、明くるも知らでと思し出づるにも、なほあさまつりごとは、怠らせ給ひぬべかめり。物なども聞し召さず、朝餉のけしきばかり觸れさせ給ひて、大床子の御膳などは、いとはるかに思し召したれば、陪膳に侍ふかぎりは、心ぐるしき御氣色を見奉りなげく。すべて近う侍ふかぎりは、男女いとわりなきわざかな、といひ合はせつゝ歎く。さるべき契こそはおはしましけめ、そこらの人の讒恨をも憚らせ給はず、この御事にふれたることをば、道理をも失はせ給ひ、今はた、かく世の中のことをも思しすてたるやうになりゆくは、いとたいふしきわざなり、と他の朝廷の例まで引き出でつづ、さゝめき歎きけり。

月日經て、若宮參り給ひぬ。いとどこの世の物ならず、清らにおよずけ給へれば、いとゆゑしう思したり。明くる年の春、坊定まり給ふにも、



いと引きこさまほしう思せど、御後見すべき人もなく、また世のうけひくまじきことなれば、なか／＼危く思し憚りて、色にも出させ給はずなりぬるを、さばかり思したれど、限こそありけれ、と世の人も聞え、女御も御心おちぬ給ひぬ。かの御祖母おば北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむところにだに尋ね行かむ、と願ひ給ひしるしにや、つひに失せ給ひぬれば、またこれを悲しみ思すこと限なし。御子六つになり給ふ年なれば、このたびは思し知りて、戀ひ泣き給ふ。年ごろ馴れむつび聞え給へるを、見奉り置く悲しびをなむ、かへす／＼のたまひける。今は内裏にのみ侍ひ給ふ。七つになり給へば、ふみはじめなどせさせ給ひて、世にしらず敏う賢くおはすれば、あまりに怖しきまで御覽ず。「今は誰も／＼え憎み給はじ。母君なくてだに、らうたうし給へ」とて、弘徽殿などにも渡らせ給ふ御供には、やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじき武士警敵なりとも、見て

はうち笑まれぬべきさまのしたまへれば、えさし放ち給はず、女御子たち二所、この御腹におはしませど、准ひ給ふべきだにぞなかりける。御かた／＼もかくれ給はず、今よりなまめかしう恥しげにおはすれば、いとをかしううち解けぬあまひき翫料に、誰も誰も思ひ聞え給へり。わざとの御學問はさるものにて、琴笛の音にも雲居を響かし、すべて言ひ續けば、こと／＼しうたてぞなりぬべき人の御様なりける。そのころ高麗人の參れるが中に、かしこき相人ありけるを聞召して、宮の中に召さむことは、宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この御子を鴻臚館に遣したり。御後見だちて仕う奉る右大辨の子のやうに思はせて率て奉る。相人驚きて、あまた／＼び傾きあやしぶ。「國の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、亂れ憂ふることやあらむ。朝廷おほやけのかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相たがふべし」といふ。辨も

いと才かしこき博士にて、いひかはしたることどもなむいと興ありける。文など作り交して、今日明日歸り去りなむとするに、かくありがたき人に對面したるよろこび、かへりては悲しかるべき心ばへを、おもしろく作りたるに、御子もいと哀なる句を作り給へるを、限なうめで奉りて、いみじき贈物どもを捧げ奉る。朝廷よりも多くの物賜はす。おのづから事ひろごりて漏らさせ給はねど、春宮の祖父右大臣など、いかなることにかと、おぼし疑ひてなむありける。帝畏き御心に、倭相をおほせて、思しよりにけるすぢなれば、今までの君を親王にもなさせ給はざりけるを、相人は誠に賢かりけりと思しあはせて、無品親王の外戚のよせなきにては、たゞよはさじ、わが御世もいと定めなきを、たゞ人にて、おほやけの御後見をするなむ、行先もたのもしげなること、思し定めて、いよく道々の才をならはせ給ふ。際ことに賢くて、たゞ人にはいとあたらしけれど、親王とな

り給ひなば、世のうたがひ負ひ給ひぬべくものし給へば、宿曜のかしこき道の人に考へさせ給ふにも、同じ様に申せば、源氏になし奉るべく、思しおきてたり。

年月に添へて、御息所の御事をおぼし忘るゝ折なし。慰むやと、さるべき人々を參らせ給へど、なずらひに思さるゝだに、いとかたき世かなと、うとましろのみ、よろづに思しなりぬるに、先帝の四の宮の御かたちすぐれ給へる、聞えたかくおはします、母后世になくかしづきさこえ給ふを、上に侍ふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう參り馴れたりければ、いはけなくおはしまし、時より見奉り、今もほの見奉りて、「亡せ給ひにし御息所の御かたちに似給へる人を、三代の宮仕に傳りぬるに、え見たてまつりつけぬに、後の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて生ひ出でさせ給へりけれ。ありがたき御かたち人になむ」と奏しけるに、誠にやと

御心とまりて、ねんごろに聞えさせ給ひけり。母后、あなおそろしや、春宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされし例も、ゆゝしうと思しつゝみて、すがたしうも思したゝざりける程に、后も亡せ給ひぬ。心細きさまにておはしますに、「たゞわが女御子たちと同じ列に思ひ聞えむ」と、いと懇に聞えさせ給ふ。侍ふ人々御後見だち、御兄の兵部卿の親王など、かく心ぼそくておはしますまむよりは、内裏住せさせ給ひて、御心も慰むべくなど思しなりて、參らせ奉り給へり。藤壺とさこゆ。實に御かたち有様あやしきまでぞ覺え給へる。これは人の御際まさりて、思ひなしめでたく、人もえ貶しめ聞え給はねば、うけばかりて飽かぬことなし。かれは人も免し聞えざりしに、御志のあやにくなりしぞかし。思しまぎるとはなけれど、おのづから御心うつろひて、こよなく思し慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去り給はぬを、ましてしげく渡らせ給ふ御方は、えはぢあへ給はず。いづれの御方も、われ人に劣らむとおぼいたるやはある。とり／＼にいとめでたけれど、うちおとなび給へるに、いと若う美しげにて、切に隠れ給へど、おのづから漏り見奉る。母御息所は影だに覺え給はぬを、いとよう似たまへりと、典侍の聞えけるを、若き御心地に、いとあはれと思ひ聞え給ひて、常に參らまほしう、なづさひ見奉らばや、とおぼえ給ふ。うへも限なき御思ひどちにて、「なうとみ給ひそ、あやしきよそへ聞えつべき心地なむする。なめしと思さで、らうたうし給へ。つらきまみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見え給ふも、似げなからずなむ」など聞えつけ給へれば、幼心地にも、はかなき花紅葉につけても、志を見え奉り、こよなう心よせ聞え給へれば、弘徽殿の女御、またこの宮とも、御中そば／＼しきゆゑ、うちそへて、もとよりのにくさも立ち出で

て、ものしと思したり。世に類なしと見奉り給ひ、名だかうおはする宮の御かたちにも、なほにほはしきは、譬へむ方なく美しげなるを、世の人光君と聞ゆ。藤壺ならび給ひて、御おぼえもとりなれば、かやく日の宮と聞ゆ。

この君の御童姿、いとかへまうく思せど、十二にて御元服し給ふ。居起ちおぼしいとなみて、限ある事に事を添へさせ給ふ。一とせの春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御ひびきに、おとさせ給はず、ところ／＼の饗など、内藏寮穀倉院など、公事に仕う奉れる、おろそかなることこそと、とりわき仰事ありて、清らを盡して仕う奉れり。おはします殿の東の廂、東向に御椅子立て、冠者の御座、引入の大臣の御座、御前にあり。申の時にぞ、源氏参り給ふ。みづらゆひ給へる面つき顔のにほひ、さまかへ給はんことをしげなり。大藏卿藏人仕う奉る。いと清らなる御

髪をそぐ程、心ぐるしげなるを、上は御息所の見ましかば、と思し出づるに、堪へがたきを、心強く念じかへさせ給ふ。かうぶりし給ひて、御休所にまかで給ひて、御衣奉りかへて、下りて拜し奉り給ふさまに、皆人涙おとし給ふ。帝はたましてえ忍びあへ給はず。思しまぎる、折もありつるを、昔のこととりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびはなる程は、あけおとりやと、疑はしく思されつるを、あさましうつくしげさ、添ひ給へり。加冠の大臣のみこ腹に、たゞ一人かしづき給ふ御女、春宮よりも御けしきあるを、思し煩ふことありけるは、この君に奉らむの御心なりけり。内にも御けしき賜はらせ給ひければ、「さらばこの折の御後見なかめるを、副臥にも」と催させ給ひければ、さ思したり。さぶらひにまかで給ひて、人々大御酒などまゐる程、親王たちの御座のすゑに、源氏着き給へり。大臣けしきばみ聞え給ふことあれど、物のつゝましき程にて、ともかくもえ

あへしらひ聞え給はず、御前より内侍宣旨うけたまはり傳へて、大臣參り給ふべきめしあれば、參り給ふ。御祿のもの、うへの命婦取りてたまふ。白き大袿に、御衣一領、例のことなり。御盃のついでに、

いとさなきはつもとゆひに長き世をちぎる心はむすびこめつや

御心ばへありて驚かさせ給ふ。

結びつる心も深きもとゆひにこき紫の色しあせずば

と奏して、長階より下りて、舞踏したまふ。左馬寮の御馬、藏人所の鷹すゑて賜り給ふ。御階のもとに、親王たち上達部つらねて、祿どもしなくに賜り給ふ。その日の御前の折櫃物、籠物など、右大辨なむ承りて仕う奉らせける。

屯食どんじき、祿の唐櫃どもなど、所せきまで春宮の御元服の折にも數まされり。なかなか隈もなく嚴しうなむ。

その夜大臣の御里に、源氏の君まかでさせ給ふ。作法世に珍らしきまで、もてかしづき聞え給へり。いとさびはにておはしたるを、ゆゑしう美しと思ひ聞え給へり。女君は少し過し給へるほどに、いと若うおはすれば似げなく恥かしとおぼいたり。この大臣の御おぼえ、いとやむごとなきに、母宮、内の一つ御后腹になむ在しければ、何方につけても物鮮かなるに、この君さへかくおはし添ひぬれば、春宮の御外祖父にて、つひに世のなかをしり給ふべき右の大臣の御勢は、物にもあらずおされ給へり。御子どもあまた、腹々にものし給ふ。宮の御腹は、藏人の少將にて、いと若うをかしきを、右の大臣の御中は、いとよからねど、え見過し給はで、かしづき給ふ四の君に婚せ奉り、劣らずもてかしづきたるは、あらまほしき御あはしどもになむ。源氏の君は、うへの常に召しまつはせば、心安く里住もえし給はず、心の中には、たゞ藤壺の御有様を、類なしと思ひ聞えて、さやう

ならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな。大殿の君、いとをか  
しげにかしづかれたる人とは見ゆれど、心にもつかず覺え給ひて、幼きほ  
どの御ひとへ心にかゝりて、いと苦しきまでぞおはしける。大人になり給  
ひて後は、ありしやうに、御簾の内にも入れ給はず、御遊の折々、琴笛の  
音に聞き通ひ、ほのかなる御聲をなぐさめにて、内裏住のみ好ましう覺え  
給ふ。五六日侍ひ給ひて、大殿に二三日など、たえなくにまかで給へど、  
たゞ今は幼き御程に、罪なくおぼしなして、いとなみかしづき聞え給ふ。  
御方々の人々、世の中におしなべたらぬを、えりととのへすぐりて侍はせ  
給ふ。御心につくべき御遊をし、おふなく思し勞く。内裏には、もとの淑  
景舎を御曹司にて、母御息所の御方々の人々、まかで散らず侍はせ給ふ。  
里の殿は、修理職内匠寮に宣旨下りて、になう改め造らせ給ふ。もとの木  
立、山のたゝずまひ、おもしろき所なるを、池の心廣くしなして、めでた

く造りのゝしる。かゝる所に、思ふやうならむ人をすゑて住まばやとのみ  
なげかしうおぼしわたる。光君といふ名は、高麗人のめで聞えてつけ奉り  
けるとぞ、いひ傳へたるとなむ。(桐壺の卷)

帚 木

光源氏、名のみことゝしう、言ひ消たれ給ふ咎多かなるに、いとゞ、  
斯かる好色事どもを、末の世にも聞き傳へて、輕びたる名をや流さむと、  
忍び給ひける隠るへ事をさへ語り傳へけむ、人の物言ひさがなさよ。さる  
は、いといたく世を憚り、眞實だち給ひける程に、なよびかにをかしき事  
は無くて、交野の少將には笑はれ給ひけむかし。まだ中將などに物し給ひ  
し時は、内裏にのみ侍ひようし給ひて、大殿には絶えなく罷出給ふを、忍  
ぶの亂れやと、疑ひ聞ゆる事もありしかど、さしもあだめき目馴れたる、

うちつけのすきくしきなどは、好ましからぬ御本性にて、稀には、強ちに引違へ心盡しなる事を、御心に思し留むる癖なむ生憎にて、然るまじき御振舞もうちまじりける。

長雨晴間なき頃、内裏の御物忌さし續きて、いと長居侍ひ給ふを、大殿には覺束なく恨めしと思したれど、萬づの御装ひ何くれと、珍らしきさまに調じ出で給ひつゝ、御子息の君達、唯この御宿直所の宮仕を勤め給ふ。宮腹の中將は、中に親しく馴れ聞え給ひて、遊び戯れをも、人よりは心安く、馴れくしく振舞ひたり。右大臣のいたはりかしづき給ふ住處は、この君もいと物憂くして、好色がましきあだ人なり。里にても、我が方のしつらひ眩くして、君の出で入りし給ふに、打連れ聞え給ひつゝ、夜晝、學問をも遊びをも諸共にして、をさく立ち後れず、何處にても纏はれ聞え給ふほどに、自ら畏まりも置かず、心の中に思ふ事をも隠しあへずなむ、

睦れ聞え給ひける。

つれづれと降り暮して、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさく人少なに、御宿直所も例よりは長閑やかなる心地するに、御殿油近くて、書どもなど見給ふついでに、近き御厨子なる、いろいろの紙なる文どもを引き出でて、中將わりなくゆかしがれば、源「さりぬべき、少しは見せむ。片はなるべきもこそ」と、許し給はねば、頭中將「その打解けて、傍痛しと思されむこそゆかしけれ。おしなべたる大方のは、數ならねど、程々につけて、書き交しつゝも見侍りなむ。おのがじし、怨めしき折々、待顔ならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ」と怨ずれば、やんごとなく、切に隠し給ふべきなどは、斯様におほさうなる御厨子などに、打置き散らし給ふべくもあらず、深く取りおき給ふべかめれば、これは、二の町の心安きなるべし。片端づつ見るに、頭「斯くさまなる物どもこそ侍りけれ」とて、

心當てに、それかかれかなど問ふうちに、言ひ當つるもあり、もて離れたる事をも思ひ寄せて疑ふもをかしと思せど、言少なにて、とかく紛らはしつゝ取隠し給ひつ。

源「其所にこそ多く集へ給ふらめ。少し見ばや。さてなむこの廚子も心よく開くべき」と宣へば、頭「御覽じ所あらむこそ難く侍らめ」など聞え給ふ序に、頭「女の、これはしもと難つくまじきは難くもあるかなと、やうくなむ見給へ知る。唯うはべばかりの情に、手走り書き、折節の答へ心得てうちしなどばかりは、随分によろしきも多かりと見給ふれど、そも眞にその方を取り出でむ選びに必ず漏るまじきは、いと難しや。わが心得たる事ばかりを、おのがじし心をやりて、人をば貶しめなど、傍痛き事多かり。親など立添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なる程は、唯片かどを聞き傳へて、心を動かす事もあめり。容貌をかしくうちおほどき、若や

かにて紛るゝ事なき程、はかなきすさびをも、人眞似に心を入るゝ事もあるに、自ら一つ故づけてし出づる事もあり。見る人後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をば繕ひて、まねび出すに、それ然あらじと、空に、如何は推し量り思ひ朽さむ。眞かと見もて行くに、見劣りせぬやうは無くなむあるべき」と、呻きたる氣色も恥づかしげなれば、いとなべてはあらねど、我も思し合はする事やあらむ、打微笑みて、源「その片かども無き人はあらむや」と宣へば、頭「いとさばかりならむ邊には、誰かは賺され寄り侍らむ。取る方なく口惜しき際と、優なりと覺ゆばかり勝れたるとは、數等しくこそ侍らめ。人の品高く生まれぬれば、人にもてかしづかれて隠るゝ事も多く、自然にその氣はひこよなかるべし。中の品になむ、人の心々おのがじしの立てたる趣も見えて、分かるべき事かたぐゝ多かるべき。下のさざみといふ際になれば、殊に耳立たずかし」とて、いと隈なげなる氣色



なるもゆかしくて、源「その品々やいかに。いづれを三つの品に置きてか分くべき。もとの品高く生まれながら、身は沈み、位短くて人げ無き、又直人の上達部など迄成りのぼりたる、我は顔にて家の内を飾り、人に劣らじと思へる、その差別をばいかが別くべき」と問ひ給ふ程に、左馬頭、藤式部丞、御物忌に籠らむとて参れり。世の好色者にて、物よく言ひ通れるを、中將待ちとりて、この品々を辨へ定め争ふ。いと聞き悪き事多かり。

馬頭「成りのぼれども、もとより然るべき筋ならぬは、世の人の思へる事も、さはいへどなほ異なり。又もとはやんごとなき筋なれど、世に經るたつき少なく、時世移るひて、おぼえ衰へぬれば、心は心として事足らず、惡びたる事ども出で來るわざなめれば、とり／＼にことわりて、中の品にぞ置くべき。受領と言ひて、人の國の事にかゝづらひ營みて、品定まりたる中にも、又きざみきざみありて、中の品のけしうはあらぬ、擇り出でつ

べき頃ほひなり。なま／＼の上達部よりも、非參議の三四位どもの、世の覺え口惜しからず、もとの根ざし踐しからぬが、安らかに身をもてなし振舞ひたる、いとかはらかなりや。家の内に足らぬ事など、はた無かめるまゝに、省かず、眩きまでもてかしづける女などの、貶しめ難く生ひ出づるも數多あるべし。宮仕に出で立ちて、思ひかけぬ幸ひ、取出づる例ども多かりかし」など言へば、源「すべて賑ははしきによるべきななり」とて笑ひ給ふを、頭「他人の言はむ様に、心得ず仰せらるゝ」とて中將憎む。

馬頭「もとの品、時世のおぼえ打合ひ、やんごとなき邊の、内々のもてなし氣はひ後れたらむは、更にも言はず、何をして斯く生ひ出でけむと、言ふ甲斐なく覺ゆべし。打合ひて勝れたらむもことわり、これこそは然るべき程と覺えて、珍らかなる事と、心も驚くまじ。なにがしが及ぶべき程ならねば、上が上は打措き侍りぬ。さて、世にありと人に知られず、寂しく

あばれたらむ律の門に、思ひの外に、らうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ、限りなく珍らしくは覺えめ。如何ではた斯かりけむと、思ふより違へる事なむ、怪しく心留まるわざなる。父の年老い、物むつかしげに肥り過ぎ、兄の顔憎げに、思ひやり異なる事なき閨の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたる事わざも、故なからず見えたらむ、片かどにても、いかゞ思ひの外にをかしからざらむ。勝れて疵なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨て難き物をば」とて、式部を見やれば、我が妹どものよろしき聞えあるを思ひて宜ふにやとや心得らむ、物も言はず。いでや上の品と思ふにだに難げなる世をと、君は思すべし。白き御衣どものなよ、かなるに、直衣許りを、しどけなく著なし給ひて、紐なども打捨てて、添ひ臥し給へる御火影、いとどめでたく、女にて見奉らまほし。この御爲には、上が上を選び出でて、猶飽くまじく見え給ふ。

さまざまの人の上どもを語り合はせつゝ、馬頭「大方の世につけて見るには咎なきも、わが物と打頼むべきを選ばむに、多かる中にもえなむ思ひ定むまじかりける。男の朝廷に仕らまつり、はかばかしき世の固となるべきも、眞の器ものとなるべきを取り出さむには、難かるべしかし。されど、賢しとても、一人二人世の中を政らしるべきならねば、上は下に助けられ、下は上に靡きて、事廣きに譲らふらむ。狭き家の内の主人とすべき一人を思ひ廻らすに、足らばで悪しかるべき大事どもなむかたゞ多かる。と有れば斯かり、あふささるるさにて、斜に然てもありぬべき人の少なきを、すきんしき心のすさびにて、人の有様を數多見合はせむの好みならねど、偏に思ひ定むべき寄邊とすばかりに、同じくは我が力入りをし直し引繕ふべき所なく、心に叶ふ様もやと、選り初めつる人の、定まり難きなるべし。必ずしも我が思ふに叶はねど、見初めつる契りばかりを捨て難

く、思ひ留まる人は、物眞實なりと見え、さて保たるゝ女の爲も、心にくく推し量らるゝなり。されど何か、世の有様を見給へ集むるまゝに、心に及ばず、いとゆかしき事も無しや。君だちの上なき御選びには、まして如何許りの人かは偶ひ給はむ、所狭く思ひ給へぬだに。容貌きたなげなく若やかなる程の、おのがじしは塵も附かじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言選をし、墨つき仄かに、心もとなく思はせつゝ、又さやかにも見てしがなと、すべなく待たせ、僅かなる聲聞くばかり言ひ寄れど、息の下に引入れ、言少ななるが、いとよくも隠すなりけり。なよびかに女しと見れば、餘り情に引籠められて、取り成せばあだめく。これを初めの難とすべし。事が中に、斜なるまじき、人の後見の方は、物の哀れ知り過し、はかなきついで之情あり、をかしきに進める方、無くてもよかるべしと見えたるに、又實々しき筋を立てて、耳挿みがちに、美相なき家刀自

の、偏に打解けたる後見許りをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたゝずまひ、善き悪しき事の、目にも耳にもとまる有様を、疎き人に、わざと打まねばむやは、近くて見む人の、聞き分き思ひ知るべからむに、語りも合はせばやと、打ちも笑まれ、涙もさしぐみ、若しはあやなきおほやけ腹立たしく、心一つに思ひ餘る事など多かるを、何にかは聞かせむと思へば、打背がれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、哀れとも打獨言たるゝに、何事ぞなどあはつかに差仰ぎ居たらむは、如何は口惜しからぬ。唯一向に見めきて、柔かならむ人を、とかく引繕ひてはなどか見ざらむ。心もとなくとも、直し所ある心地すべし。實に差向ひて見む程は、さてもらうたき方に罪免し見るべきを、立離れては、然るべき事をも言ひ遣り、折節にし出でむ業の、あだ事にも、まめ事にも、我が心と思ひ得る事なく、深き至り無からむは、いと口惜しく、頼もしげなき答や、なほ苦しから

む。常は少しそば／＼しく、心づき無き人の、折節につけて、出で榮えするやうもありかし」など、隈なき物言ひも、定めかねていたく打歎く。

馬頭「今はたゞ品にもよらじ、容貌をば更にも言はじ。いと口惜しく、拗けがましきおぼえだに無くば、たゞ偏に物眞實に、静かなる心の趣ならむ寄邊をぞ、終の頼所には思ひ置くべかりける。餘りのゆゑよし、心ばせ、打添へたらむをば、喜びに思ひ、少し後れたる方あらむをも、強ちに求め加へじ。後やすく長閑けき所だに強くば、うはべの情は、おのづからもて附けつべき業をや、艶に物恥して、恨み言ふべき事をも、見知らぬ様に忍びて、上は強顔く操作り、心一つに思ひ餘る時は、言はむ方無く凄き言の葉、哀れなる歌を詠み置き、忍ばるべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海面などに、這ひ隠れぬかし。童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞きて、いと哀れに悲しく、心深き事かなと、涙をさへなむ落し侍りし。

今思ふには、いと輕々しく、殊更びたる事なり。志深からむ男を置きて、見る目の前につらき事ありとも、人の心を見知らぬやうに、逃げ隠れて人を惑はし、心をも見むとする程に、長き世の物思ひになる、いと味氣無き事なり。心深しやなど譽め立てられて、哀れ進みぬれば、やがて尼になりぬかし。思ひ立つ程は、いと心澄めるやうにて、世に顧みすべくも思へらず。「いであな悲し、斯くはた思しなりにけるよ」など様に、相知れる人來訪らひ、一向に憂しとも思ひ離れぬ男、聞きつけて涙落せば、使ふ人、古御達など、「君の御心は哀れなりけるものを、あたら御身を」など言ふに、みづから額髪をかき探りて、あへなく心細ければ、打響みぬかし。忍ぶれど涙こぼれそめぬれば、折々毎に得念じ得ず、悔やしき事も多かめるに、佛もなか／＼心ぎたなしと見給ひつべし。濁に染める程よりも、生浮びにては、かへりて悪しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。絶えぬ宿世淺からで、

尼にもなさで尋ね取りたらむも、やがて「相添ひて」、その思ひ出で恨めしき節あらざらむや。悪しくも善くも相添ひて、とあらむ折も、斯からむきざみをも、見過したらむ仲こそ、契り深く哀れならめ、我も人も、後めたく心置かれじやは。又斜に移ろふ方あらむ人を恨みて、氣色ばみ背かむ、はた痴がましかりなむ。心は移ろふ方ありとも、見初めし志いとほしく思はば、さる方のよすがに思ひてもありぬべきに、さやうならむたじろぎに、絶えぬべき業なり。すべて萬づの事なだらかに、怨すべき事をば、見知れる様に仄めかし、恨むべからむ節をも、憎からずかすめなさは、それにつけて、哀れも増りぬべし。多くは、我が心も、見る人から治りもすべし。餘り無下に打緩べ見放ちたるも、心安くらうたきやうなれど、おのづから輕き方にぞ覺え侍るか。繫がぬ船の浮きたる例も、實にあやなし。然は侍らぬか」と言へば、中將頷く。頭「さしあたりて、をかしたも哀れ

とも、心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ。我が心過無くて見過さば、さし直してもなどか見ざらむと覺えたれど、それ然しもあらじ。ともかくも違ふべき節あらむを、長閑やかに見忍ばむより外に、増す事あるまじかりけり」と言ひて、我が妹の姫君は、この定めに適ひ給へりと思へば、君の打眠りて詞交ぜ給はぬを、さう／＼しく心やましと思ふ。馬頭、物定め博士になりて、ひゞらぎ居たり。中將は、この理聞き果てむと、心に入れてあへしらひ居給へり。

馬頭「萬づの事によそへて思せ。木の道の工匠の、萬づの物を、心に任せて作り出すも、臨時の翫弄物の、その物と、跡も定まらぬは、そばつき戯ればみたるも、實に斯うもしつべかりけりと、時に附けつゝ、様を變へて、今めかしきに目移りて、をかしきもあり。大事として、眞に麗はしき、人の調度の飾とする、定まれるやうあるものどもを、難なくし出づる事な

む、猶眞の物の上手は、様殊に見え分かれ侍る。又繪所に上手多かれど、墨書きに選ばれて、次々に更に劣り優る差別ふとしも見え分かれず。斯かれど、人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國の烈しき獸の形、目に見えぬ鬼の顔などの、おどろくしく作りたる物は、心に任せて、一きは人の目を驚かして、實には似ざらめど、さてありぬべし。尋常の山のたゞずまひ、水の流、目に近き人の家居有様、實にと見え、懐かしくやはらびたる形などを、靜かに書きませて、すくよかならぬ山の氣色、木深く、世離れて疊みなし、氣近き籬の内をば、その心しらひ掟などをなむ、上手はいと勢ひ殊に、わる者は及ばぬ所多かめる。手を書きたるにも、深き事は無くて、此處彼處點長に走り書き、そこはかたなく氣色ばめるは、打見るに、かどくしく氣色立ちたれど、猶眞のすぢを細やかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、今一度取り並べて見れば、猶實になむ

寄りける。はかなき事だに斯くこそ侍れ、まして人の心の、時に當りて氣色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思ひ給へて侍り。その初めの事、すきくしくとも申し侍らむ」とて、近く居寄れば、君も目覺し給ふ。中將いみじく信じて、頬杖をつきて對ひ居給へり。法の師の、世の理説き聞かせむ所の心地するも、且はをかしけれど、斯かるついでには、各々睦言もえ忍び止めずなむありける。

馬頭「早う、まだいと下臈に侍りし時、哀れと思ふ人侍りき。聞えさせつるやうに、容貌などいと眞ほにも侍らざりしかば、若き程の好色心地には、この人を止まりにとも思ひとめ侍らず。寄邊とは思ひながら、さうくしくして、とかく紛れ歩き侍りしを、物怨じをいたくし侍りしかば、心づきなく、いと斯からで、おいらかならましかばと思ひつゝ、餘りいと許しなく疑ひ侍りしもうるさくて、斯く數ならぬ身を見も放たで、など斯く

しも思ふらむと心苦しき折々も侍りて、自然に心治めらるゝやうになむ侍りし。この女のあるやう、もとより思ひ至らざりける事にも、いかでこの人の爲にはと、無き手を出し、後れたる筋の心をも、猶口惜しくは見えじと思ひ勵みつつ、とにかくにつけて、もの眞實に後見、露にても、心に違ふ事は無くもがなと思へりし程に、進める方と思ひしかど、とかくに靡き來てなよび行き、醜き容貌をも、この人に見や疎まれむと、理なく思ひ繕ひ、疎き人に見えは、面伏にや思はれむと、憚り恥ぢて、操にもてつて、見馴るる儘に、心も怪しうはあらず侍りしかど、唯この憎き方一つなむ、心治めず侍りし。當時思ひ侍りしやう、斯う強ちに隨ひ怖ぢたる人なめり。いかで懲るばかりの業して、嚇して、この方も少しよろしくもなり、さがなさも止めむと思ひて、眞に憂しなども思ひて絶えぬべき氣色ならば、斯ばかり我に隨ふ心ならば思ひ懲りなむ、と思ひ給へて、殊更に情

なく強顔き様を見せて、例の腹立ち怨ずるを、馬頭「斯くおどましくは、いみじき契り深くとも、絶えて又見じ。限りと思はば、斯く理なき物疑ひはせよ。行く先長く見えむと思はば、辛き事ありとも、念じて斜に思ひなりて、斯かる心だに失せなば、いと哀れとなむ思ふべき。人並々にもなり、少し大人びむに添へて、又並ぶ人無くなむあるべき」など、賢く教へ立つるかなと思ひ給へて、我猛く言ひそし侍るに、少し打笑ひて、女「萬づに見立なく、物げなき程を見過して、人數なる世もやと待つ方は、長閑に思ひなされて、心疚しくもあらず。辛き心を忍びて、思ひ直らむ折を見つむと、年月を重ねむあいな頼みは、いと苦しくなむあるべければ、互に背きぬべきさざみになむある」と妬げに言ふ時に、腹立たしくなりて、憎げなる事どもを言ひ勵まし侍るに、女もえをさめぬ筋にて、指一つを引き寄せてくひて侍りしを、おどろおどろしく託ちて、馬頭「斯かる疵さへつきぬ

れば、いよく交らひをすべきにもあらず。辱しめ給ふめる官位、いとゞしく、何につけてかは人めかむ。世を背きぬべき身なめり」など言ひ嚇して、馬頭「さらば今日こそは限りなめれ」と、この指を屈めて罷出ぬ。

馬「手を折りて逢ひ見しことを數ふればこれ一つやは君が憂き節え怨みじ」など言ひ侍れば、流石に打泣きて、

女「憂き節を心一つに數へ來てこや君が手を別るべき折」

など、言ひしろひ侍りしかど、誠には變るべき事とも思ひ給へずながら、日頃經るまで消息も遣はさず、あくが罷り歩くに、臨時の祭の調樂に、夜更けて、いみじう霽降る夜、これかれ罷り散るゝ所にて、思ひ廻らせば、なほ家路と思はむ方は、又無かりけり。内裏邊の旅寢すさまじかるべく、氣色ばめる邊は、そゞろ寒くやと、思う給へられしかば、いかゞ思へると氣色も見がてら、雪を打拂ひつゝ罷りて、なま悪く爪くはるれど、さり

とも今宵日頃の恨みは解けなむと思ふ給へしに、火灰かに壁に背け、萎えたる衣どもの厚肥えたる、大いなる籠に打懸けて、引き上ぐべき物の帷など打上げて、今宵ばかりやと待ちける様なり。さればよと心驕りするに、正身は無し。さるべき女房どもばかり留まりて、「親の家に、この夜さりなむ渡りぬる」と答へ侍り。艶なる歌も詠まず、氣色ばめる消息もせで、いと直屋隱に情無かりしかば、あへなき心地して、さがなく許し無かりしも、我を疎みねと思ふ方の心やありけむと、さしも見給へざりし事なれど、心疚しきまゝに思ひ侍りしに、著るべき物、常よりも心留めたる色合し様、いとあらまほしくて、流石に我が見捨ててむ後をさへなむ、思ひ遣り後見たりし。さりとて絶えて思ひ放つ様はあらじと思ひ給へて、とかく言ひ侍りしを、背きもせず、尋ね惑はさむとも隠れ忍びず、かゞやかしからず答へつゝ、女「たゞ、ありし心ながらは、えなむ見過すまじき。改め



て長閑に思ひならばなむ、あひ見るべき」など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと、思ひ給へしかば、暫し懲らさむの心にて、然改めむとも言はず、いたくつなびきて見せし間に、いといたく思ひ歎きて、果敢なくなり侍りにしかば、戯れにくくなむ覺え侍りし。偏に打頼みたらむ方は、然許りにてありぬべくなむ思ひ給へ出でらるゝ。果敢なきあだ事をも、眞の大事をも、言ひ合はせたるに甲斐無からず、立田姫と言はむにもつき無からず、棚機の手にも劣るまじく、その方も具してうるせくなむ侍りし」とて、いと哀れと思ひ出でたり。中將、「その棚機の裁ち縫ふ方をのどめて長き契りにぞ肖えまし。實にその立田姫の錦には、又如くものあらじ。はかなき花紅葉と言ふも、折節の色合つきなく、はかしくしからぬは、露の榮えなく消えぬる業なり。さるにより難き世ぞとは、定めかねたるぞや」と、言ひはやし給ふ。

馬頭「さて又、同じ頃罷り通ひし所は、人も立ち優り、心ばせ誠に故ありと見えぬべく、打詠み走り書き、掻い弾く爪音、手つき口つき、皆たどくしからず、見聞き渡り侍りき。見る目も事も無く侍りしかば、このさがな者を、打解けたる方にて、時々隠るへ見侍りし程は、こよなく心留まり侍りき。この人亡せて後、如何はせむ、哀れながらも過ぎぬるは甲斐無くて、屢々罷り馴るゝまゝに、少し眩く、艶に好ましき事は、目につかぬ所あるに、打頼むべくも見えず かねくゝにのみ見せ侍る程に、忍びて心かはせる人ぞありけらし。神無月の頃ほひ、月面白かりし夜、内裏より罷出侍るに、或上人來會ひて、この車に相乗りて侍れば、大納言の家に罷り泊らむとするに、この人の言ふやう、「今宵人待つらむ宿なむ、怪しく心苦しき」とて、この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩より、池の水、影見えて、月だに宿る住處を過ぎむも流石にて、下り侍りぬかし。もとより

然る心を交せるにやありけむ、この男いたくすゞろぎて、門近き廊の簀子だつものに尻をかけて、とばかり月を見る。菊いと面白くうつろひ渡りて、風に競へる紅葉の亂れなど、哀れと實に見えたり。懷なりける笛取り出でて吹き鳴らし、「影もよし」など、つゞしり歌ふ程に、能く鳴る和琴を調べとのへたりけるを、うるはしく掻き合はせたりし程、けしうはあらずかし。律の調は、女の物やはらかに掻き鳴らして、簾の内より聞えたるも、今めきたる物の聲なれば、清め澄める月に折つき無からず。男いたく感でて、簾の下に歩み來て、「庭の紅葉こそ、げに踏み分けたる跡もなけれ」など妬ます。菊を折りて、

殿上人「琴の音も菊も菊も得ならぬ宿ながらつれなき人を引きや留めける

悪かめり」など言ひて、「今一聲聞きはやすべき人のある時に、手な残し給ひそ」など、いたく戯れかゝれば、女いたう聲繕ひて、

女「木枯に吹き合はすめる笛の音を引き留むべき言の葉ぞ無き」

と艶き交すに、憎くなるをも知らず、又、箏の琴を盤渉調に調べて、今めかしく掻い弾きたる爪音、かど無きにはあらねど、眩き心地なむし侍りし。たゞ時々打語らふ宮仕人などの、飽くまで戯ればみすきたるは、さても、見る限りはをかしくもありぬべし、時々にも、さる所にて忘れぬよすがと思ふ給へむには、頼もしげ無く差過いたりと心置かれて、その夜の事に事託けてこそ罷り絶えにしか。この二つの事を思ふ給へ合はするに、若き時の心にだに、猶さやうに持て出でたる事は、いと怪しく頼もしげ無く覺え侍りき。今より後は、ましてさのみなむ思ふ給へらるべき。御心のまゝに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉篠の上の露などの、艶にあえかなるすぎ／＼しさのみこそ、をかしく思さるらめ。今さりとも、七年餘りの程に思し知り侍りなむ。なにがしが賤しき諫にて、

好色撓めらむ女には心置かせ給へ。過して、見む人のため頑なる名をも立てつべきものなり」と誠む。中將、例の顔く。君少し片笑みて、さる事とは思すべかめり。源「何方につけても、人悪く、はしたなかりける御物語かな」とて、打笑ひおはさうず。

中將「某は癡者の物語をせむ」とて、「いと忍びて見初めたりし人の、さても見つべかりし氣はひなりしかば、長らふべき物としも、思ひ給へざりしかど、馴れ行くまゝに、哀れと覺えしかば、絶えん忘れぬものと思う給へしを、さばかりになれば、打頼める氣色なども見えき。頼むにつけては、恨めしと思ふ事もあらむと、心ながら覺ゆる折々も侍りしを、見知らぬやうにて、久しき跡絶をも、斯う邂逅なる人とも思ひたらず、朝夕にもつけたらむ有様に見えて、心苦しかりしかば、頼め渡る事などもありさかし。親も無くいと心細げにて、さらばこの人こそはと、事につれて思へ

るさまも、らうたげなりき。斯う長閑けきに穩しくて、久しく罷らざりし頃、この見給ふる邊より、情なくうたてある事をなむ、さる便りありてかすめ言はせたりける。後にこそ聞き侍りしか。さる憂き事やあらむとも知らず、心には忘れずながら、消息などもせで久しく侍りしに、無下に思ひ萎れて心細かりければ、幼き者などもありしに、思ひ煩ひて、瞿麥の花を折りて遣せたりし」とて涙ぐみたり。源「さてその文の詞は」と問ひ給へば、

頭「いさや、異なる事も無かりさや。

女山がつの垣ほ荒るとも折々に憐れはかけよ撫子の露  
思ひ出でしまゝに罷りたりしかば、例のうらも無きものから、いと物思ひ顔にて、荒れたる家の露滋きを眺めて、蟲の音に競へる氣色、昔物語めきて覺え侍りし。

頭咲きまじる花は何れと分かねども猶常夏に如くものぞ無き

大和撫子をばさし置きて、まづ塵をだになど親の心を取る。

女打拂ふ袖も露けきとこ夏に嵐吹き添ふ秋も來にけり

と果敢なげに言ひなして、實々しく恨みたる様も見えず。涙を漏らし落しても、いと恥かしく慎ましげに紛らはし隠して、辛きをも思ひ知りけりと見えむは理なく苦しき物と思ひたりしかば、心安くて又跡絶置き侍りし程に、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。まだ世にあらば、果敢なき世にぞさすらふらむ。哀れと思ひし程に、煩はしげに思ひ纏はす氣色見えましかば、斯くもあくがらさざらまし。こよなき跡絶置かず、然るものに爲なして、長く見るやうも侍りなまし。かの撫子のらうたく侍りしかば、いかで尋ねむと思ひ給ふるを、今に得こそ聞きつけ侍らぬ。これこそ宣ひつる果敢なき例なめれ。つれなくて、辛しと思ひけるをも知らで、哀れ絶えざり

しも、益なき片思なりけり。今やう／＼忘れ行く際に、彼れ將た、得しも思ひ離れず、折々人遣りならず胸焦るゝ夕もあらむと覺え侍り。これなむ、え保つまじく頼もしげ無き方なりける。されば彼のさがな者も、思ひ出である方に忘れ難けれど、さし當りて見むには、煩はしく、ようせずば飽きたき事もありなむや。琴の音の進めりけむ、かど／＼しさも、好色たる罪重かるべし。この心もとなきも、疑ひ添ふべければ、何れと、終に思ひ定めずなりぬること世の中や。唯斯くぞとりどりに較べ苦しかるべき。この様々の善き限りを取り具し、難すべき種はひ交ぜぬ人は、何處にかはあらむ。吉祥天女を思ひ懸けむとすれば、法氣づき奇しからむこそ、又侘しかりぬべけれ」とて、皆笑ひ給ひぬ。

頭中將「式部が所にぞ氣色ある事はあらむ。少しづつ語り申せ」と責めらる。式部「下が下の中には、何でふ事か聞召し所侍らむ」と言へど頭の君、ま

めやかに遅しと責め給へば、何事を取り申さむと思ひ廻らすに、式部「まだ文章の生に侍りし時、賢き女の例をなむ見給へし。かの馬頭の申し給へる様に、公事をも言ひ合はせ、私さまの世に住まふべき心掟を、思ひ廻らさむ方も至り深く、才の際なまなまの博士恥づかしく、すべて口開かすべくなく侍らざりし。それは、或博士の許に、學問などし侍るとて、罷り通ひし程に、主人の女ども多かりと聞き給へて、はかなき序に言ひ寄りて侍りしを、親聞きつけて、杯持て出でて、「我が兩つの途歌ふを聽け」となむ、聞えごち侍りしかど、をさく打解けても罷らず、かの親の心を憚りて、流石にかゝづらひ侍りし程に、いと哀れに思ひ後見、寢覺の語らひにも、身の才つき、朝廷に仕う奉るべき、道々しき事を教へて、いと清げに、消息文にも、假字と言ふものを書き交ぜず、うべくしく言ひまはし侍るに、おのづから罷り絶えて、その者を師としてなむ、僅なる腰折文作る事な

ど習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、懐かしき妻子と打頼まむに、無才の人、生悪ならむ振舞など見えむに、恥づかしくなむ見え侍りし。況いて君達の御爲には、はかくしく、した、かなる御後見は、何にかはせさせ給はむ。果敢なし口惜しと、かつ見つゝも、唯我が心につき、宿世の引く方侍るめれば、男しもなむ、仔細無きものは侍るめる」と申せば、残りを言はせむとて、中將等「さてくをかしかりける女かな」と賺い給ふを、心は得ながら、鼻の邊をこづきて語りなす。式部「さていと久しく罷らざりしに、物の便りに立ち寄りて侍れば、常の打解け居たる方には侍らで、心疚しき物越にてなむ逢ひて侍りし。ふすぶるにやと、痴がましくも、又よき節なりとも思ひ給ふるに、この賢人將た、軽々しき物怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひ取りて恨みざりけり。聲もはやりかにて言ふ様、一月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによ

りなむ、え對面賜はらぬ。目のあたりならずとも、然るべからむ雜事等は承らむ」と、いと哀れにうべくしく言ひ侍り。答へに何とかは言はれ侍らむ、唯、式部「承りぬ」とて、立ち出で侍るに、さうべくしくや覺えけむ、女「この香失せなむ時に立ち寄り給へ」と高やかに言ふを、聞き過さむいとほし、暫し立ち休らふべきに、將た侍らねば、實にその臭ひさへ、花やかに立ち添へるも術無くて、逃目を使ひて、

式部「さゝがにの振舞しるさ夕暮にひるま過ぐせと言ふがあやなさ

如何なる事託ぞや」と言ひも果てず走り出で侍りぬるに、追ひて、

女逢ふ事の夜をし隔てぬ仲ならばひる間も何か眩からまし、

流石に口疾くなどは侍りき」と、徐々と申せば、君達あさましと思ひて、虚言とて笑ひ給ふ。君達「何處の然る女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向ひ居たらめ。むくつけき事」と、爪弾をして、言はむ方なしと、式部をあ

はめ憎みて、君達「少し宜しからむ事を申せ」と責め給へど、式部「これより珍らしき事は候ひなむや」とて下りぬ。

馬頭「すべて男も女も、わる者は、僅かに知れる方の事を、残り無く見せ盡くさむと思へるこそいとほしけれ。三史五經の道々しき方を、明らかに曉り明さむこそ愛敬なからめ、などかは、女と言はむからに、世にある事の公私につけて、無下に知らず至らずしもあらむ。わざと習ひ學ばねども、少しもかどあらむ人の、耳にも目にも留まる事、自然に多かるべし。さる儘には、眞字を走り書きて、さるまじきどちの女文に、半ば過ぎて書きすくめたる、あなうたて、この方のたをやかならましかばと見ゆかし。心地にはさしも思はざらめど、自らこはしくしき聲に讀みなされなどしつゝ、殊更びたり。これは上臈の中にも、多かる事ぞかし。歌詠むと思へる人の、やがて歌に纏はれ、をかしき故事をも、初めより取り込みつゝ、すさ

まじき折々、詠みかけたるこそものしき事なれ。返しせねば情無し、得せざらむ人ははしたなからむ。然るべき節會など、五月の節に急ぎ參る朝、何のあやめも思ひ鎮められぬに、得ならぬ根を引き掛け、九日の宴に、先づ難き詩の心を思ひ廻らし、暇なき折に、菊の露をかこち寄せなどやらの、つき無き營に合はせ、然ならでも、おのづから實に後に思へば、をかしくも哀れにもあべかりける事の、その折につき無く、目にも留まらぬなどをも、推し量らず詠み出でたる、なか／＼心後れて見ゆ。萬づの事に、などかはさてもと覺ゆる折から時々思ひ分かね許りの心にては、よしばみ情立たざらむなむ目易かるべき。すべて心に知れらむ事をも、知らず顔にもてなし、言はまほしからむ事をも、一つ二つの節は、過すべくなむあべかりける」など言ふにも、君は人一人の御有様を、心の中に思ひ續け給ふ。これは、足らず又差過ぎたる事無く物し給ひけるかなと、有り難きに

もいと胸塞がる。何方により果つとも無くて、はて／＼は怪しき事どもになりて、明し給ひつ。(帚木の卷)

### 夕 顔

六條邊の御忍び歩行の頃、内裏より罷出給ふ中宿に、大貳の乳母のいたく煩ひて尼になりける、訪らはむとて、五條なる家尋ねておはしたり。御車入るべき門は鎖したりければ、人して惟光召させて、待たせ給ひける程、むつかしげなる大路の様を見渡し給へるに、この家の傍に、檜垣といふもの新しうして、上は、半葎四五間ばかりあげ渡して、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透影、數多見えて覗く。立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、強ちに丈高き心地ぞする。如何なる者の集へるならむと、様變りて思さる。御車もいたう寢し給へり。前も追はせ給はず、

誰とか知らむと打解け給ひて、少し差覗き給へれば、門は葎のやうなるを押し開けたる、見入れの程なく物はかなき住居を、あはれに、何處かさしと思ほしなせば、玉の臺も同じ事なり。切掛だつ物に、いと青やかなる葛の、心地よげに蔓ひ懸れるに、白き花ぞ、おのれ獨笑みの眉開けたる。源「遠方人に物申す」と、獨言ち給ふを、御隨身つい居て、隨身「かの白く咲けるをなむ夕顔と申し侍る。花の名は人めきて、斯うあやしき垣根になむ咲き侍りける」と申す。實にいと小家がちに、むつかしげなる邊の、此面彼面あやしう打ちよろほひて、むねくしからぬ軒の端毎に、蔓ひ纏はれたるを、源「口惜しの花の契りや。一房折りて參れ」と宣へば、この押し開けたる門に入りて折る。流石に戯れたる遣戸口に、黄なる生絹の單袴、長く著なしたる童のをかしげなる出で來て打招く。白き扇の、いたう燻がしたるを、童「これに置きて參らせよ。枝も情なげなめる花を」とて、取

らせたれば、門あけて惟光の朝臣の出で來たるして奉らす。惟光「鍵を置き惑はし侍りて、いと不便なるわざなりや。物のあやめ見給へ分くべき人も侍らぬ邊なれど、亂がはしき大路に立ちおはしまして」と、畏まり申す。引き入れて下り給ふ。惟光が兄の阿闍梨、婿の參河守、女など渡り集ひたる程にて、斯くおはしましたる慶を、また無き事に畏まる。尼君も起き上りて、尼「惜しげなき身なれど、捨て難く思ひ給へつる事は、たゞ斯く御前に侍ひ御覽せらるゝ事の變り侍りなむ事を、口惜しう思ひ給へ躊躇ひしかど、忘む事の驗に蘇りてなむ、斯く渡りおはしますを見給へ侍りぬれば、今なむ阿彌陀佛の御光も、心清く待たれ侍るべき」など聞えて弱げに泣く。源「日頃癒り難く物せらるゝを、安からず歎き渡りつるに、かく世を離るゝさまに物し給へば、いと哀れに口惜しうなむ。命長くて、猶位高くなども見なし給へ。さてこそ九品の上にも、障りなく生まれ給はめ。



この世に少し憾み遺るは、わろきわざとなむ聞く」など、涙ぐみて宣ふ。片ほなるをだに、乳母などやうの思ふべき人は、淺ましう眞ほに見なすものを、ましていと面だたしう、なづさひ仕う奉りけむ身もいたはしく、辱く思ほゆべかめれば、漫ろに涙がちなり。子どもはいと見苦しと思ひて、背きぬる世の去り難きやうに、自ら纏み御覽せられ給ふと、突きじろひ目くはす。君はいと哀れと思して、源「いはけなかりける程に、思ふべき人々の打捨ててもなし給ひにける名残、育む人数多あるやうなりしかど、親しく思ひ睦ぶる筋は、また無くなむ思ほえし。人となりて後は、限りあれは、朝夕にしもえ見奉らず、心のまゝに訪らひ參うづる事はなけれど、猶久しう對面せぬ時は心細く覺ゆるを、さらぬ別れはななくもがな」など、細やかに語らひ給ひて、押拭ひ給へる御袖の匂ひも、いと所狭きまで薰り満ちたるに、げに世に思へば、おしなべたらぬ人の御宿世ぞかしと、尼君を

もどかしと見つる子どもも、皆うちしほたれけり。修法などまたく始むべき事など掟て宣はせて、出で給ふとて惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば、持て馴らしたる移り香、いと染み深う懐かしうて、をかしうすさび書きたり。

女心あてにそれかとぞ見る白露の光添へたる夕顔の花

そこはかとなく書き紛らはしたるも、貴はかに故づきたれば、いと思ひの外にをかしう覺え給ふ。惟光に、源「この西なる家は何人の住むぞ。問ひ聞きたりや」と宣へば、例のうるさき御心とは思へども、さはえ申さで、惟光「この五六日此處に侍れど、病者の事を思ひ給へあつかひ侍る程に、隣の事はえ聞き侍らず」など、はしたなげに聞ゆれば、源「憎しところ思ひたれな。されど、この扇の尋ぬべき故ありて見ゆるを、猶この邊の心知れらむ者を召して問へ」と宣へば、入りて、この宿守なる男を呼びて問ひ聞

く。惟光「揚名介なりける人の家になむ侍りける。男は田舎に罷りて、女なむ若く事好みて、兄弟など宮仕人にて來通ふと申す。詳しき事は、下人のえ知り侍らぬにやあらむ」と聞ゆ。さらばその宮仕人なり、したり顔に物馴れて言へるかなと、めざましかるべき際にやあらむと思せど、さして聞えかゝれる心の、憎からず過し難きぞ、例の此の方には重からぬ御心なめりかし。御疊紙に、いたう有らぬさまに書き變へ給ひて、

源寄りてこそそれかとも見め黄昏にほのく見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はす。まだ見ぬ御様なりけれど、いと著く思ひ當てられ給へる御側目を見過さで、さし驚かしけるを、御答へもなく程經ければ、なまはしたなきに、斯くわざとめかしければ、甘えて、いかに聞えむなど言ひしろふべかめれど、めざましと思ひて隨身は參りぬ。

御前の松明仄かにて、いと忍びて出で給ふ。半菰は下してけり。隙々よ

り見ゆる火の光、螢よりけに仄かに哀れなり。御志の所には、木立前裁など、なべての所に似ず、いと長閑に心憎く住みなし給へり。打解けぬ御有様などの、氣色殊なるに、有りつる垣根思ほし出でらるべくもあらずかし。翌朝少し寝過し給ひて、日さし出づる程に出で給ふ。朝けの御姿は、げに人のめで聞えむも理なる御様なりけり。今日もこの菰の前渡りし給ふ。來し方も過ぎ給ひけむ邊なれど、たゞはかなき一ふしに御心留まりて、いかなる人の住處ならむとは、往來に御目とまり給ひけり。

惟光、日頃ありて參れり。惟光「煩ひ侍る人、猶弱げに侍れば、とかく見給へあつかひてなむ」など聞えて、近く參り寄りて聞ゆ。惟光「仰せられし後なむ、隣の事知りて侍る者呼びて、問はせ侍りしかど、はかなくしくも申し侍らず。いと忍びて五月の頃ほひより物し給ふ人なむあるべけれど、その人とは、更に家の内の人にだに知らせずとなむ申す。時々中垣の垣間見

し侍るに、げに若き女どもの透影見え侍り。褶だつもの、かごと許り引きかけて、冊く人侍るなめり。昨日夕日の残りなくさし入りて侍りしに、文書くとて居て侍りし人の、顔こそいとよく侍りしか。物思へるけはひしで、在る人々も忍びて打泣く様などなむ、著く見え侍る」と聞ゆ。君打笑み給ひて、知らばやと思したり。覚えこそ重かるべき御身の程なれ、御齡の程、人の靡きめで聞えたる様など思ふには、好き給はざらむも、情なくさう／＼しかるべし。人の承け引かぬほどにてだに、なほ然りぬべきあたりは、好ましう覺ゆるものと思ひ居り。惟光「若し見給へ得る事もや侍ると、はかなき序作り出でて、消息など遣はしたりき。書き馴れたる手して、口疾く返事などし侍りき。いと口惜しうはあらぬ若人どもなむ侍るめる」と聞ゆれば、源「猶言ひ寄れ。尋ね知らではさう／＼しかりなむ」と宣ふ。かの下が下と、人の思ひ貶しし住居なれど、その中にも、思ひの外

に口惜しからぬを見つけたらばと、珍しう思ほすなりけり。中略

秋にもなりぬ。人遣りならず、心盡しに思ほし亂るゝ事どもありて、大殿には絶間置きつゝ、怨めしくのみ思ひ聞え給へり。六條邊りにも、解け難かりし御氣色を赴け聞え給ひて後、引返し斜ならむはいとほしかし。されど餘所なりし御心惑ひのやうに、強ちなる事はなきも、如何なる事にかと見えたり。女は、いと物を餘りなるまで思ししめたる御心様にて、齡の程も似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜がれの寝ざめ寝ざめ、思し萎るゝ事いと様々なり。霧のいと深き朝、いたくそゝのかされ給ひて、眠たげなる御氣色に、打歎きつゝ出で給ふを、中將の御許、御格子一間上げて、見奉り送り給へと思しく、御几帳引き遣りたれば、御頭擡げて見出し給へり。前裁のいろ／＼亂れたるを、過ぎがてに休らひ給へる様、げに類なし。廊の方へおはするに、中將の君も御供に參る。紫苑色の

折にあひたる羅の裳、鮮やかに引結ひたる腰つき、たをやかに艶きたり。見返り給ひて、隅の間の勾欄に暫し引き居ゑ給へり。打解けたらぬもてなし、髪の下端、めざましくもと見給ふ。

源「咲く花にうつるてふ名はつゝめども折らで過ぎ憂き今朝の朝顔  
いかゞすべき」とて、手を捉へ給へれば、いと馴れて疾く、

中將「朝霧の晴間も待たぬけしきにて花に心を留めぬとぞ見る

と公事にぞ聞えなす。をかしげなる侍童の、姿好ましく殊更めきたる、指貫の裾露けげに、花の中にまじりて、朝顔折りて參る程など、繪に畫かまほしげなり。大方にうち見奉る人だに、心しめ奉らぬはなし。物の情知らぬ山賤も、花の陰には猶休らはまほしきにや。この御光を見奉る邊りは、程々につけて、わが愛しと思ふ女を仕う奉らせばやと願ひ、若しは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、賤しきにて、猶この御邊りに侍はせ

むと、思ひ寄らぬは無かりけり。ましてさりぬべき序の御言の葉も、懐かしき御氣色を見奉る人の、少し物の心を思ひ知るは、いかがは疎かに思ひ聞えむ。明暮打解けてしもおはせぬを、心もとなき事に思ふべかめり。

まことや、かの惟光が預りの垣間見は、いとよく案内見とりて申す。

惟光「その人とは更にあ思ひ寄り侍らず。人にいみじく隠れ忍ぶる氣色になむ見え侍るを、徒然なるまゝに、南の半菰ある長屋に渡り來つゝ、車の音すれば、若き子ども覗きなどすべかめるに、この主と思しきも、這ひ渡る時侍るめる。容貌なむ、仄かなれど、いとらうたげに侍る。一日前追ひて渡る車の侍りしを、覗きて、童女の急ぎ來て、「右近の君こそ。先づ物見給へ。中將殿こそ、これより渡り給ひぬれ」と云へば、又よろしき大人出で來て、あなかまと、手搔くものから、「いかに然は知るぞ、いで見む」とて這ひ渡る。打橋だつものを路にてなむ通ひ侍る。急ぎ來る者は、衣の裾

を物に引きかけて、よろほひ倒れて、橋よりも落ちぬべければ、「いでこの葛城の神こそ、嶮しうし置きたれ」と、むつがりて、物覗きの心も醒めぬめり。君は御直衣姿にて、御隨身共もありし。某くれがしと數へしは、頭中將の隨身、その小舎人童をなむ、しるしに言ひ侍りし」など聞ゆれば、源「確かに其の車をぞ見まし」と宣ひて、若しかの哀れに忘れざりし人にやと思しよるも、いと知らまほしげなる御氣色を見て、惟光「私の懸想もいとよくし置きて、案内も残る所なく見給へ置きながら、唯我がどちと知らせて物などいふ若き御許の侍るを、虚溺れしてなむ、謀られ罷り歩く。いと能く隠したりと思ひて、小さき子どもなどの侍るが、言過りしつべきも言ひ紛らはして、又人無きさまを強ひて作り侍る」など語りて笑ふ。源「尼君の訪らひにものせむ序に、垣間見させよ」と宣ひけり。假にても、宿れる住居の程を思ふに、これこそ、かの人の定め悔りし下の品ならめ。そ

の中に、思ひの外にかしき事もあらば、など思ほすなりけり。惟光、聊かの事も御心に違はじと思ふに、おのれも隈なき好色心にて、いみじくたばかり惑ひ歩きつゝ、忍びておはしまさせ初めてけり。この程の事、くだくしければ例の漏らしつ。

女を、さしてその人と尋ね出で給はねば、我も名告りをし給はで、いとわり無う寔れ給ひつゝ、例ならず下り立ち歩き給ふは、疎かには思されぬなるべしと見れば、我が馬をば奉りて、御供に走り歩く。惟光「懸想人のいと物げ無き足もとを、見つけられて侍らむ時、辛くもあるべきかな」など佗ぶれど、人に知らせ給はぬ儘に、かの夕顔の案内せし隨身ばかり、さては顔むげに知るまじき童一人ばかりぞ率ておはしける。もし思ひ寄る氣色もやとて、鄰近中宿りをだにし給はず。女もいと怪しう心得ぬ心地のみして、御使に人を添へ、曉の道を窺はせ、御在所見せむと尋ねれど、そこは

かたなく惑はしつゝ、流石に哀れに見ではあるまじく、この人の御心に懸りたれば、便無く軽々しき事ども思ほし返し詫びつゝ、いと屢々おはします。斯かる筋は、眞實人の亂るゝ折もあるを、いと目易くしづめ給ひて、人の咎め聞ゆべき振舞はし給はざりつるを、怪しきまで、今朝の程晝間の隔も覺束なくなど、思ひ煩はれ給へば、且はいと物狂ほしく、さまで心留むべき事のさまにもあらずと、いみじく思ひ覺し給ふに、人の氣はひ、いと淺ましく柔かにおほどきて、物深く重き方は後れて、一向に若びたるものから、世をまだ知らぬにもあらず。いとやんごと無きにはあるまじ。何處にいと斯うしも留まる心ぞと、返す返す思す。いと殊更めきて、御装束をも、簍れたる狩の御衣を奉り、様を變へ、顔をも仄見せ給はず、夜深き程に、人を鎮めて出で入りなどし給へば、昔在りけむものの變化めきて、うたて思ひ歎かるれど、人の御氣はひ將た、手探にも著きわざなりけ

れば、誰許りにかはあらむ、猶此の好色者のし出でつる業なめりと、大夫を疑ひながら、せめて強顔く知らず顔にて、かけて思ひ寄らぬ様に、撓まず戯れ歩けば、如何なる事にかと心得難く、女方も、怪しう様違ひたる物思ひをなむしける。

君も、斯くうら無くたゆめて這ひ隠れなば、何處をはかりとか我も尋ねむ。假初の隠處と將た見ゆめれば、何所にも移ろひ行かむ日を、何時とも知らじと思すに、追ひ惑はして斜に思ひ做しつべくば、唯斯ばかりのすさびにても、過ぎぬべき事を、更にさて過してむと思されず、人目を思して隔て置き給ふ夜な／＼などは、いと忍び難く、苦しきまで思ほえ給へば、猶誰となくて二條院に迎へてむ、若し聞えありて便無かるべき事なりとも、然るべきにこそは。我が心ながら、いと斯く人に染む事は無きを、如何なる契りにかはありけむなど、思ほし寄る。源「いざ、いと心安き所に

て、長閑に聞えむ」など語らひ給へば、女「なほ怪しう、斯く宜へど、世づかぬ御もてなしなれば、物恐ろしくこそあれ」と、若びて言へば、實にと微笑まれ給ひて、源「實にいづれか狐ならむな。たゞ謀られ給へかし」と、懐かしげに宜へば、女もいみじう靡きて、さもありぬべう思ひたり。世に無くかたはならむ事なりとも、一向に隨ふ心は、いと哀れげなる人に見給ふに、猶かの頭中將の常夏疑はしく、語りし心様先づ思ひ出でられ給へど、忍ぶるやうこそはと、強ちにも問ひ出で給はず。氣色ばみてふと背き隠るべき心様などは無ければ、かれ／＼に跡絶置かむ折こそは、さやうに思ひ變る事もあらめ。心ながらも少しは移ろふ事あらむこそ、哀れなるべけれとさへ思しけり。

八月十五夜隈なき月影に、隙多かる板屋残り無く漏り來て、見慣らひ給はぬ住居のさまも珍らしきに、曉近くなりけるなるべし。隣の家々あや

しき賤の男の聲々、目醒して、賤「あはれいと寒しや。今年こそ生業にも頼む所少なく、田舎の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ。聞き給へや」など言ひ交はすも聞ゆ。いと哀れなる己がじしの營みに、起き出でてそゝめき騒ぐも程無きを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居の様なめりかし。されど長閑に、辛きも憂きも、傍痛きことも、思ひ入れたる様ならで、我がもてなし有様は、いと貴はかに見めかしく、又無くらうがはしき隣の用意なさを、如何なる事も聞き知りたる様ならねば、なか／＼耻ぢ赫かむよりは罪免されてぞ見えける。ごほ／＼と、鳴る神よりも、おどろ／＼しく蹈み轟かすから碓の音も枕上と覺ゆ。あな耳かしがましと、これにぞ思さる。何の響とも聞き入れ給はず、いと怪しう目覺しき音なひとのみ聞き給ふ。くだ／＼しき事のみ多かり。白妙の衣うつ碓の音も、微に此方彼方聞き渡され、空飛ぶ鴈の

聲、取り集めて忍び難き事多かり。端近き御座所なりければ、遣戸を引き開け給ひて、諸共に見出し給ふ。程なき庭にざれたる吳竹、前栽の露は、なほ斯かる所も同じ如煌きたり。蟲の聲々亂りがはしく、壁の中の蟋蟀だに間遠に聞き慣らひ給へる御耳に、差當てたるやうに鳴き亂るるを、なかく様變へて思さるるも、御志一つの淺からぬに、萬づの罪免さるゝなめりかし。白き裕薄色のなよゝかなるを重ねて、花やかならぬ姿、いとらうたげにあえかなる心地して、其處と取り立てて勝れたる事もなければ、細やかにたをたをととして、物うち言ひたる氣はひ、あな心苦しと、唯いとらうたく見ゆ。心ばみたる方を少し添へたらばと見給ひながら、なほ打解けて見まほしく思さるれば、源「いざ、唯この邊近き所に、心安くて明さむ。斯くてのみはいと苦しかりけり」と宣へば、夕顔「如何でか俄ならむ」と、いとおいらかに言ひて居たり。この世のみならぬ契りなど迄頼め給ふに、

打解くる心ばへなど、怪しく様かはりて、世馴れたる人とも覚えねば、人の思はむ所もえ憚り給はで、右近を召し出でて、隨身を召させ給ひて、御車引き入れさせ給ふ。この在る人々も、斯かる御志の疎かならぬを見知れば、おほめかしながら頼みを懸け聞えたり。

明方も近うなりにけり。鶏の聲などは聞えて、御嶽精進にやあらむ、唯翁びたる聲に額づくぞ聞ゆる。起居の氣はひ堪へ難げに行ふ。いとあはれに、朝の露に異ならぬ世を、何を貪る身の祈りにかと聞き給ふに、「南無當來導師」とぞ拜むなる。源「かれ聞き給へ。この世とのみは思はざりけり」と、あはれがり給ひて、

源 優婆塞が行ふ道をしるべにて來む世も深き契り違ふな  
長生殿の舊き例はゆゝしくて、羽を交さむとは引きかへて、彌勒の世をぞかね給ふ。行く先の御頼め、いところちたし。



夕顔 先の世の契り知らるゝ身の憂さに行末かねて頼み難さよ  
 斯やうの筋なども、さるは心もと無かめり。いさよふ月に、ゆくりなくあ  
 くがれむ事を、女は思ひやすらひ、とかく宜ふ程に、俄に雲隠れて、明け  
 行く空いとをかし。はした無き程にならぬ前にと、例の急ぎ出で給ひて、  
 輕らかに打載せ給へれば、右近ぞ乗りける。その邊近き某の院におはし著  
 きて、預召し出づるほど、荒れたる門の忍草茂りて見上げられたる、譬し  
 へ無く木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げ給へれば、御袖もいたう  
 濡れにけり。源「まだ斯やうなる事を慣らはざりつるを、心盡なる事にも  
 ありけるかな。」

古も斯くやは人の惑ひけむ我がまだ知らぬ東雲の道  
 慣らひ給へりや」と宜ふ。女恥ぢらひて、

夕顔「山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなむ

心細く」とて、物恐ろしうすぐげに思ひたれば、かのさし集ひたる住居の  
 心習ならむと、をかしう思す。御車入れさせて、西の對に御座などよそふ  
 程、勾欄に御車引かけて立ち給へり。右近、艶なる心地して、來し方の事  
 なども、人知れず思ひ出でけり。

預いみじく經營して歩く氣色に、この御有様知り果てぬ。ほの／＼と物  
 見ゆる程に、下り給ひぬめり。假初なれど清げに設ひたり。預「御供に人  
 も侍はざりけり。不便なるわざかな」とて、睦まじき下家司にて、殿にも  
 仕う奉る者なりければ、參り寄りて、預「然るべき人召すべきにや」など  
 申さすれど、源「殊更に人來まじき隱處覓めたるなり。更に心より外に漏  
 らすなと口固めさせ給ふ。御粥など急ぎ參らせたれど、取り次ぐ御まかな  
 ひ打合はず。まだ知らぬ事なる御旅寢に、息長川と契り給ふより外の事な  
 し。」

日闌くる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いといたく荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立いと疎ましく物古りたり。氣近き草木などは殊に見どころ無く、皆秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いと氣疎げになりける所かな。別納の方にぞ、曹司などして、人住むべかめれど、此方は離れたり。源「氣疎くもなりにける所かな。さりとも鬼なども、我をば見免してむ」と宣ふ。顔は猶隠し給へれど、女のいと辛しと思べければ、賣に斯ばかりにて隔てあらむも、事の様に違ひたりと思して、

源「夕露に紐とく花は玉鉾の便に見えし縁こそありけれ  
露の光や如何に」と宣へば、後目に見おこせて、

夕顔「光ありと見し夕顔の上露は黄昏時の空目なりけり  
と仄かに言ふ。をかしと思しなす。實に打解け給へる様世に無く、所柄まいてゆゝしきまで見え給ふ。源「盡きせず隔て給へる辛さに、顯はさじ

と思ひつるものを。今だに名告りし給へ。いとむくつけし」と宣へど、夕顔「海士の子なれば」とて、流石に打解けぬさま、いとあいだれたり。源「よしこれも我からなめり」と、怨み且は語らひ暮し給ふ。惟光尋ね聞えて、御菓物など參らす。右近が言はむ事、流石にいとほしければ、近くもえ侍ひ寄らず。斯くまで辿り歩き給ふもをかしう、さもありぬべき有様こそはと、推し量らるるにも、我がいとよく思ひ寄りぬべかりし事を、譲り聞えて、心廣さよなど、目覺しうを思ひ居る。

譬しへ無く靜かなる夕の空を眺め給ひて、奥の方は暗う物むつかし、と女の思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥し給へり。夕映を見交はして、女も、斯かる有様を思ひの外に怪しき心地はしながら、萬づの歎忘れて、少し打解け行く氣色、いとらうたし。つと御傍に添ひ暮して、物をいと恐ろしと思ひたる様、若う心苦し。格子疾く下し給ひて、大殿油參らせて、

源「名残無くなりたる御有様にて、猶心の中の隔残し給へるなむ辛き」と怨み給ふ。内裏に如何に求めさせ給ふらむを、何處に尋ねらむと思し遣りて、且は怪しの心や。六條邊にも、如何に思ひ亂れ給ふらむ。怨みられむも苦しう理なりと、いとほしき筋は先づ思ひ出で聞え給ふ。何心も無き差し向ひをあはれと思すまゝに、餘り心深く、見る人も苦しき御有様を、少し取捨てばやとぞ、思ひ比べられ給ひける。

宵過ぐる程少し寝入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女居て、靈「己がいとめでたしと見奉るをば、尋ねも思ほさで、斯く異なる事無き人を率ておはして時めかし給ふこそ、いとめざましく辛けれ」とて、この御傍の人を掻き起さむとすと見給ふ。物に壓るゝ心地して、驚き給へれば、火も消えにけり。うたて思さるれば、太刀を引抜きて、打置き給ひて、右近を起し給ふ。これも恐ろしと思ひたる様にて參り寄れり。源「渡殿なる

宿直人起して、紙燭さして參れと言へ」と宣へば、右近「いかでか罷らむ、聞うて」と言へば、源「あな若々し」と打笑ひ給ひて、手を叩き給へば、山彦の答ふる聲、いと疎し。人は得聞きつけで參らぬに、この女君いみじく戦き惑ひて、如何様にせむと思へり。汗もしとゞになりて、われかの氣色なり。右近「物懼ぢをなむ理無くせさせ給ふ御本性にて、如何に思さるゝにか」と右近も聞ゆ。いとかわくくて、晝も空をのみ見つるものを。いとほしと思して、源「われ人を起さむ。手叩けば、山彦の答ふる、いと煩し。こゝに暫し近く」とて、右近を引き寄せ給ひて、西の妻戸に出でて、戸を押し開け給へれば、渡殿の火も消えにけり。風少し打ち吹きたるに、人は少なくて、侍ふ限り皆寝たり。この院の預の子の、睦まじく使ひ給ふ若き男、又上童一人、例の隨身許りぞありける。召せば、御答へして起きたれば、源「紙燭さして參れ。隨身も並打ちして、絶えず聲づくれと仰せよ。人

離れたる所に、心解けて寝ぬるものか。惟光の朝臣の來りつらむは」と問はせ給へば、預の子「侍ひつれど、仰せ言も無し。曉に御迎へに參るべき由申してなむ罷出侍りぬる」と聞ゆ。

この斯う申す者は、瀧口なりければ、弓弦いとつきたくしく打ち鳴らし、て、「火危し」と言ふく、預が曹司の方へ去ぬるなり。内裏を思し遣りて、名對面は過ぎぬらむ。瀧口の宿直奏今こそと推し量り給ふは、まだいたう更けぬにこそは。歸り入りて探り給へば、女君はさながら臥して、右近は傍に俯し臥したり。源「こは何ぞ。あな物狂ほしの物懼ぢや。荒れたる所は、狐などやうのもの、人脅さむとて、氣恐ろしう思はするならむ。まろあれば、さやうの物には威されじ」とて、引き起し給ふ。右近「いとうたて、亂り心地の惡しう侍れば、俯し臥して侍るなり。御前にこそ、理無く思さるらめ」と言へば、源「そよ。など斯うは」とて搔探り給ふに、息もせず。

引き動かし給へど、なよなよとして、我にもあらぬ様なれば、いといたく若びたる人にて、物に氣取られぬるなめりと、せむ方無き心地し給ふ。紙燭持て參れり。右近も動くべき様にもあらねば、近き御几帳を引き寄せ、源「なほ持て參れ」と宣ふ。例ならぬ事にて、御前近くもえ參らぬ慎まじさに、長押にもえ上らず。源「なほ持て來や。所に從ひてこそ」と召し寄せて見給へば、ただこの枕上に、夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物語などにこそ斯かる事は聞けと、いと珍らかにむくつけけれど、先づこの人は如何になりぬるぞと思ほす心騒ぎに、身の上も知られ給はず、添ひ臥して、「や、」と驚かし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息は疾く絶え果てにけり。言はむ方なし。頼もしく如何にと言ひ觸れ給ふべき人もなし。法師などをこそは、斯かる方の頼もしきものには思すべけれど、さこそ心強がり給へど、若き御心地にて言ふ甲斐無くなり

ぬるを見給ふに、遣る方無くて、つと抱きて、源「吾が居生き出で給へ。いみじき目な見せ給ひそ」と宣へど、冷え入りにたれば、氣はひ物疎くなり行く。右近は、唯あなむつかしと思ひける心地皆覺めて、泣き惑ふ様いといみじ。南殿の鬼の、某の大臣を脅しける例を思し出でて、心強く、源「さりととも徒らに成り果て給はじ。夜の聲はおどろくし。あなかま」といさめ給ひて、いと慌しきに、惘れたる心地し給ふ。この男を召して、源「こゝにいと怪しう、物に魘はれたる人の惱ましげなるを、唯今惟光の朝臣の宿れる所に罷りて、急ぎ參るべき由言へと仰せよ。某の阿闍梨其處にものする程ならば、此處に來べき由忍びて言へ。かの尼君などの聞かむに、おどろおどろしく言ふな。斯かる歩行許さぬ人なり」など、物宣ふやうなれど、胸は塞がりて、この人を空しくしなしてむ事のいみじく思さるゝに添へて、大方のむくくしさ譬へむ方なし。夜中も過ぎにけむかし、風の

や、荒々しう吹きたるは。まして松の響木深く聞えて、氣色ある鳥の枯聲に鳴きたるも、鼻はこれにやと覺ゆ。打思ひ廻らすに、此方彼方氣遠く疎ましきに、人聲せず。などて斯く果敢なき宿りは取りつるぞと、悔しさも遣らむ方なし。右近は物も覺えず、君につと添ひ奉りて、戦き死ぬべし。又これも如何ならむと、心空にて執らへ給へり。われ一人賢しき人にて、思し遣る方ぞ無きや。火は爪かに瞬きて、母屋の際に立てたる屏風の上、此處彼處の隈々しく見ゆるに、物の足音ひしくと踏み鳴らしつゝ、後より寄り來る心地す。惟光疾く參らなむと思す。在所定めぬものにて、此處彼處尋ねける程に、夜の明くる程の久しさ、千夜を過さむ心地し給ふ。辛うじて鶏の聲遙かに聞ゆるに、命を賭けて、何の契りに斯かる目を見るらむ。我が心ながら、斯かる筋におふけ無く有るまじき心の報いに、斯く來し方行く先の例となりぬべき事はあるなめり。忍ぶとも、世にある事

隠れなくて、内裏に聞召されむ事を初めて、人の思ひ言はむ事、よからぬ童べの口ずさびになりぬべきなめり。あり／＼て痴がましき名を取るべきかなと思し廻らす。辛うじて惟光の朝臣參れり。夜中曉と言はず御心に隨へる者の、今宵しも侍はで、召しにさへ怠りつるを、憎しと思ほすものから、召し入れて、宣ひ出でむ事のあへ無きに、ふと物も言はれ給はず。右近、大夫の氣はひ聞くに、初めよりの事、打思ひ出でられて泣くを、君も得堪へ給はで、我一人賢しがり抱き持ち給へりけるに、この人に息を伸べ給ひてぞ、悲しき事も思されける。とばかり、いといたく、えも止めず泣き給ふ。やゝためらひて、源「こゝにいと怪しき事のあるを、淺ましと言ふにも餘りてなむある。斯かる頓の事には誦經などをこそはすなれとて、その事どもせさせむ、願なども立てさせむとて、阿闍梨ものせよと言ひ遣りつるは」と宣ふに、惟光「昨日山へ罷り上りにけり。先づいと珍らかなる事に

も侍るかな。かねて、例ならず御心地の物せさせ給ふ事や侍りつらむ、源「さる事も無かりつ」とて泣き給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人もいと悲しくて、己れもよゝと泣きぬ。

さいへど年打老成、世の中のとある事も、潮染みぬる人こそ、物の折節は頼もしかりけれ、何れも／＼若きどちにて、言はむ方も無けれど、惟光「この院守などに聞かせむ事は、いと便無かるべし。この人一人こそ睦じうもあらめ、おのづから物言ひ漏らしつべき眷屬も立ち交りたらむ。先づこの院を出でおはしましね」と言ふ。源「さて、これより人少ななる所は如何でかあらむ」と宣ふ。惟光「實にさぞ侍らむ。かの故郷は、女房などの悲びに堪へず泣き惑ひ侍らむに、隣繁く咎むる里人多く侍らむに、おのづから聞え侍らむを、山寺こそ、なほ斯やうの事おのづから行き交り、物紛るゝ事侍らめ」と、思ひまはして、惟光「昔見給へし女房の尼にて侍る、東山の

邊に移し奉らむ。惟光が父の朝臣の乳母に侍りし者の、みづはぐみて住み侍るなり。邊は人繁きやうに侍れど、いとかごかに侍り」と聞えて、明け離るゝ程の紛れに、御車寄す。この人を得抱き給ふまじければ、上席に押し包みて、惟光乗せ奉る。いとさゝやかにて、疎ましげも無くらうたげなり。健かにしも得せねば、髪はこぼれ出でたるも、目昏れ惑ひて、淺ましう悲しと思せば、成り果てむ様を見むと思せど、惟光「はや、御馬にて二條の院へおはしまさなむ。人騒がしくなり侍らぬ程に」とて、右近を添へて乗すれば、君に馬をば奉りて、我は徒歩より、括り引き上げなどして出で立つ。かつはいと怪しく覺えぬ送りなれど、御氣色のいみじきを見奉れば、身を捨てて行くに、君は物も覺え給はず、我かの様にておはし著きたり。人々、一何處よりおはしますにか。惱ましげに見えさせ給ふ」など言へど、御帳の内に入り給ひて胸をおさへて思ふに、いといみじければ、など

て乗り添ひて行かざりつらむ。生き返りたらむ時、如何なる心地せむ。見捨てて行き別れにけりと辛くや思はむと、心惑ひの中にも思すに、御胸せき上ぐる心地し給ふ。御頭も痛く、身も熱き心地して、いと苦しく惑はれ給へば、斯く果敢なくて、我も徒らに成りぬるなめりと思す。日高くなれど、起き上り給はねば、人々怪しがりて、御粥などそゝのかし聞ゆれど、苦しくて、いと心細く思さるゝに、内裏より御使あり。昨日も得尋ね出で奉らざりしより、覺束ながらせ給ふ。大殿の君達參り給へど、頭中將ばかりを、源「立ちながら此方に入り給へ」と宣ひて、御簾の内ながら宣ふ。源「乳母にて侍る者の、この五月の頃ほひより、重く煩ひ侍りしが、頭刺り忌む事受けなどして、その験にや、蘇りたりしを、この頃又起りて弱くなむなりにたる。今一度訪らひ見よと申したりしかば、幼きよりなづさひし者の、今はの刻に辛しと思はむと、思ひ給へて罷りしに、その家なりけ

る下人の病しけるが、俄にえ生き敢へで亡くなりけるを、恐ぢ憚りて、日を暮してなむ取り出で侍りけるを、聞きつけ侍りしかば、神事なる頃は、いと不便なる事と思ふ給へ畏りて、得參らぬなり。この曉より、咳嗽病にや侍らむ、頭いと痛くて苦しく侍れば、いと無禮にて聞ゆる事など宣ふ。中將「さらば然る由をこそ奏し侍らめ。昨夜も御遊びに、長く寤め奉らせ給ひて、御氣色悪しく侍りき」と聞え給ひて、立ち還り、頭中將「いかなる行觸にかゝらせ給ふぞや。陳べ遣らせ給ふ事こそ、眞とも思ひ給へられね」と言ふに、胸打潰れ給ひて、源「斯く細かにはあらで、唯覺えぬ穢らひに觸れたる由を奏し給へ。いとこそ怠々しく侍れ」と、強顔く宣へど、心の中には、言ふ甲斐無く悲しき事を思すに、御心地も惱ましければ、人にも見合はせ給はず。藏人の辨を召し寄せて、眞實に斯かる由を奏せさせ給ふ。大殿などにも、斯かる事ありて得參らぬ御消息など聞え給ふ。

日暮れて惟光參れり。斯かる穢らひありと宣ひて、參る人々も皆立ちながら罷出れば、人繁からず。召し寄せて、源「いかにぞ。今はと見果てつや」と宣ふまゝに、袖を御顔に押し當てて泣き給ふ。惟光も泣くく、「今は限りにこそは物し給ふめれ。長々と籠り侍らむも便無きを、明日なむ日宜しく侍れば、とかくの事、いと尊き老僧の相知りて侍るに、言ひ語らひつけ侍りぬる」と聞ゆ。源「添ひたりつる女は如何に」と宣へば、惟光「それなむ亦、え生くまじう侍るめる。我も後れじと惑ひ侍りて、今朝は谷にも落ち入りぬべくなむ見給へつる。かの故郷の人に告げ遣らむと申せど、「暫し思ひ鎮めよ。事のさま思ひ廻らして」となむこしらへ置き侍りつる」と語り聞ゆる儘に、いとみじと思して、源「我もいと心地惱ましく、如何なるべきにかとなむ覺ゆる」と宣ふ。惟光「何か更に思ほし物せさせ給ふ。然るべきにこそ萬づの事侍らめ。人にも漏らさじと思ひ給ふれば、惟光下



り立ちて、萬づは物し侍る」など申す。源「然かし。然みな思ひなせど、浮びたる心のすさびに人を徒らに爲しつる託言、負ひぬべきがいと辛きなり。少將の命婦などにも聞かすな。尼君まして斯様の事など諫めらるゝを、心恥かしくなむ覺ゆべき」と、口固め給ふ。惟光「さらぬ法師ばらなどにも、皆言ひなす様異に侍り」と聞ゆるにぞかゝり給へる。仄聞く女房など、「怪しく何事ならむ。穢らひの由宣ひて、内裏にも参り給はず。又斯く私語き歎き給ふ」と、仄々怪しがる。源「更に事無くしなせ」と、その程の作法宣へど、惟光「何か事々しくすべきにも侍らず」とて立つが、いと悲しく思さるれば、源「便無しと思ふべけれど、今一度かの亡骸を見ざらむがいといふせかるべきを、馬にでもものせむ」と宣ふを、いと愈々しき事とは思へど、惟光「然思されむは如何せむ。早おはしまして、夜更けぬ前に歸らせおはしませ」と申せば、この頃の御簀に設け給へる狩の御装束著替

へなどして出で給ふ。

御心地搔き昏し、いみじく堪へ難ければ、斯く怪しき路に出で立ちても、危かりし物懲りに、如何にせむと思し煩へど、なほ悲しさの遣る方無く、唯今の骸を見では、又いつの世にか、ありし容貌をも見むと思し念じて、例の大夫隨身を具して出で給ふ。路遠く覺ゆ。十七日の月さし出でて、河原の程、御前の火も仄かなるに、鳥部野の方など見遣りたる程など、物むつかしきも、何とも覺え給はず、搔き亂る心地し給ひて、おはし著きぬ。邊さへ凄さに、板屋の傍に堂建てて行へる尼の住居、いとあはれなり。御燈明の影仄かに透きて見ゆ。その屋には女一人泣く聲のみして、外の方に、法師ばらの二三人物語りしつゝ、わざとの聲立てぬ念佛ぞする。寺々の初夜も皆行ひ果てて、いとしめやかなり。清水の方ぞ、光多く見えて人の氣はひも繁かりける。この尼君の子なる大徳の、聲尊くて經打

讀みたるに、涙残りなく思さる。入り給へれば、火取り背けて、右近は屏風隔てて臥したり。いかに佗しからむと見給ふ。恐ろしき氣も覺えず、いとらうたげなる様して、まだいさゝか變りたる所無し。手を執らへて、源「我に今一度聲をだに聞かせ給へ。如何なる昔の契りにかありけむ、暫しの程に心を盡くして哀れに覺えしを、打捨てて惑はし給ふがいみじき事」と、聲も惜しまず泣き給ふ事限り無し。大徳達も、誰とは知らぬに、怪しと思ひて皆涙落しけり。

右近をば、源「よふ二條院へ」と宣へど、右近「年頃、幼く侍りしより、片時立離れ奉らず馴れ聞えつる人に、俄に別れ奉りて、何處にか歸り侍らむ如何に成り給ひにきとか人にも言ひ侍らむ。悲しき事をばさるものにて、人に言ひ騒がれ侍らむがいみじき事」と言ひて、泣き惑ひて、右近「煙にたぐひて慕ひ参りなむ」と言ふ。源「理なれど、然なむ世の中はある。別れと

いふものの悲しからぬは無し。とあるも斯かるも、同じ命の限りあるものになむある。思ひ慰めて、我を頼め」と宣ひこしらへても、源「斯く言ふ我が身こそは、生き留まるまじき心地すれ」と宣ふも頼もしけ無しや。惟光「夜は明方になり侍りぬらむ。はや歸らせ給ひなむ」と聞ゆれば、願みのみせられて、胸もつと塞がりて出で給ふ。路いと露けきに、いとゞしき朝霧に、何處ともなく惑ふ心地し給ふ。ありしながら打臥したりつる様、打交はし給へりし、わが紅の御衣の著られたりつるなど、如何なりけむ契りにかと、道すがら思さる。御馬にも、はかばかしく乗り給ふまじき御様なれば、また惟光添ひ扶けておはしまさするに、堤の程にて馬よりすべり下りて、いみじく御心地惑ひければ、源「斯かる路の空にて、はぶれぬべきにやあらむ。更に得行き著くまじき心地なむする」と宣ふに、惟光も心地惑ひて、我がはかゞしくばさ宣ふとも、斯かる道に率て出で奉るべ

きかはと思ふに、いと心慌しければ、川の水にて手を洗ひて、清水の観音を念じ奉りても、術無く思ひ惑ふ。君も強ひて御心を起して、心の中に佛を念じ給ひて、又とかく扶けられ給ひてなむ、二條院へ歸り給ひける。怪しう夜深き御歩きを、人々、「見苦しき業かな、この頃例よりも靜心なく御忍歩きの打頻る中にも、昨日の御氣色のいと惱ましう思したりしには、如何で斯く辿り歩き給ふらむ」と歎き合へり。

誠に、臥し給ひぬる儘にいとたく苦しがり給ひて、二三日になりぬるに、むげに弱る様にし給ふ。内裏にも、聞召し歎く事限りなし。御祈り方々に隙なくのゝしる。祭、祓、修法など、言ひ盡くすべくもあらず。世に類なくゆゝしき御有様なれば、世に長くおはしますまじきにやと、天の下の人の騒ぎなり。苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など近く賜はりて侍はせ給ふ。惟光、心地も騒ぎ惑へど、思ひのどめて、この人の

たづき無しと思ひたるを、もてなし助けつゝ侍はす。君は、いさゝか隙ありて思さるゝ時は、召し出でて使ひなどし給へば、程なく交らひ著きたり。服いと黒うして、容貌などよからぬど、かたはに見苦しからぬ若人なり。源「怪しう短かりける御契りに引かされて、我も世に得あるまじきなめり。年頃の頼み失ひて心細く思ふらむ慰めにも、若し存命へば、萬づにはぐくまむとこそ思ひしか。程も無く又立ち添ひぬべきが、口惜しくもあるべきかな」と、忍びやかに宣ひて、弱げに泣き給へば、言ふ甲斐なき事をば措きて、いみじう惜しと思ひ聞ゆ。

殿の内の人、足を空に思ひ惑ふ。内裏より御使、雨の脚よりもけに繁し。思し歎きおはしますを聞き給ふに、いと辱くて、せめて強く思しなる。大殿もいみじく經營し給ひて、日々に渡り給ひつゝ、様々の事をせさせ給ふ驗にや、廿餘日いと重く煩ひ給へれど、異なる名残残らず、おこた

りざまに見え給ふ。穢らひ忌み給ひしも、一つに満ちぬる夜なれば、覺束ながらせ給ふ御心理無くて、内裏の御宿直所に參り給ひなす。大殿、わが御車にて迎へ奉り給ひて、御物忌何やかやと、むつかしう慎ませ奉り給ふ。我にもあらず、あらぬ世に返りたる様に、暫しは覺え給ふ。

九月二十日の程にぞ、おこたり果て給ひて、いといたう面瘦せ給へれど、なか／＼いみじう艶かしうて、眺めがちに音をのみ泣き給ふ。見奉り咎むる人もありて、御物怪なめり、など言ふもあり。右近を召し出でて、長閑やかなる夕暮に、物語などし給ひて、源「猶いとなむ怪しき。などて其の人と知られじとは、隠い給へりしぞ。眞に蜚の子なりとも、然ばかりに思ふを知らで隔て給ひしかばなむ、辛かりし」と宣へば、右近「などてか深く隠し聞え給ふ事は侍らむ。いつの程にてか、何ならぬ御名告りを聞え給はむ。初めより怪しう覺えぬ様なりし御事なれば、「現とも覺えずなむ

ある」と宣ひて、御名隠しも、然ばかりにこそはと聞え給ひながら、等閑にこそ紛らはし給ふらめとなむ、憂き事に思したりし」と聞ゆれば、源「あい無かりける心競どもかな。我は然隔つる心も無かりき。たゞ斯様に人に免されぬ振舞をなむ、まだ習はぬ事なる。内裏に諫め宣はするを初め、慎む事多かる身にて、果敢なく人に戯言を言ふも、所狭う、取りなし煩き身の有様になむあるを、果敢なかりし夕より、怪しう心に懸りて強ちに見奉りしも、斯かるべき契りにこそは物し給ひけめと、思ふも哀れになむ、又折返し辛う覺ゆる。斯う長かるまじきにては、など然しも心に染みて哀れと覺え給ひけむ。猶委しう語れ、今は何事を隠すべきぞ。七日々々に佛書かせても、誰が爲とか、心の中にも思はむ」と宣へば、右近「何かは隔て聞えさせ侍らむ。自ら忍び過し給ひし事を、亡き御後に、口さが無くやはと思ひ給ふるばかりになむ。親達は早う亡せ給ひにき。三位中將とな

む聞えし。いとらうたきものに思ひ聞え給へりしかど、我が身の程の心許無さを思すめりしに、命さへ堪へ給はずなりにし後、果敢なき物の便りにて、頭中將まだ少將に物し給ひし時、見初め奉らせ給ひて、三年許りは志ある様に通ひ給ひしを、去年の秋の頃、かの右の大臣殿より、いと恐ろしき事の聞えまうで來しに、物懼ぢを理なくし給ひし御心に、せむ方無う思し怖ぢて、西の京に、御乳母の住み侍る所になむ、這ひ隠れ給へりし。それもいと見苦しきに住み佗び給ひて、山里に移ろひなむと思したりしを、今年よりは塞がりたる方に侍りければ、違ふとて、怪しき所に物し給ひしを、見顯はされ奉りぬる事と思し歎くめりし。世の人に似ず物慎みをし給ひて、人に物思ふ氣色を見えむは、恥かしきものにし給ひて、強顔くのみもてなしてこそ、御覽ぜられ奉り給ふめりしか」と語り出づるに、然ればよと思し合はせて、愈々哀れも増りぬ。源「幼き人惑はしたりと、中將の

憂へしは、然る人や」と問ひ給ふ。右近「然、一昨年の春ぞ物し給へりし。女にていとらうたげになむ」と聞ゆ。源「さて何處にぞ。人に然とは知らせて我に得させよ。迹果敢なくいみじと思ふ御形見に、いと嬉しかるべくなむ」と宣ふ。源「かの中將にも傳ふべけれど、言ふ甲斐なき託言負ひなむ。とざま斯うさまにつけて、はぐくまむに咎あるまじきを、そのあらむ乳母などにも、異様に言ひなして物せよかし」など語らひ給ふ。右近「然らばいと嬉しくなむ侍るべき。かの西の京にて生ひ出で給はむは、心苦しうなむ。はかしく扱ふ人無しとて、彼處になむ」と聞ゆ。

夕暮の静かなるに、空の氣色いと哀れに、御前の前栽枯々に、蟲の音も鳴き噎れて、紅葉のやう／＼色づく程、繪に畫きたる様に面白きを見渡し、心より外にかしき交らひかなと、かの夕顔の宿りを思ひ出づるも恥かし。竹の中に家鶴といふ鳥の、ふつ／＼かに鳴くを聞き給ひて、彼の在り

し院に、この鳥の鳴きしを、いと恐ろしと思ひたりし様の、面影にらうたく思ほし出でらるれば、源「年は幾つにか物し給ひし。怪しう、世の人に似ずあえかに見え給ひしも、斯く長かるまじくてなりけり」と宣ふ。右近「十九にやなり給ひけむ。右近は亡くなりける御乳母の棄て置きて侍りければ、三位の君のらうたがり給ひて、かの御邊去らず、生ふし立て給ひしを思ひ給へ出づれば、如何でか世に侍らむとすらむ。いとしも人にと悔しうなむ。物果敢なげに物し給ひし人の御心を、頼もしき人にて、年頃馴ひ侍りける事」と聞ゆ。源「果敢なびたるこそ女はらうたけれ。賢く人に靡かぬ、いと心づき無き業なり。自ら抄々しく直よかならぬ心習ひに、女はたゞ柔和にて、取り外しては、人に欺かれぬべきが、流石に物慎みし、見む人の心には従はむなむ哀れにて、我が心の儘に取り直して見むに、懐かしく覺ゆべき」など宣へば、右近「この方の御好みには、持て離れ給はざ

りけりと、思ひ給ふるにも、口惜しく侍る業かな」とて泣く。空の打曇りて、風冷やかなるに、いといたくうちながめ給ひて、

見し人の烟を雲と眺むれば夕の空も睦まじきかな

と獨言給へど、え差し答も聞えず。斯様にておはせましかばと思ふにも、胸のみ塞がりて覺ゆ。耳聾しかりし砧の音を、思し出づるさへ戀しくて、

源「正に長き夜」と打誦じて臥し給へり。次略

かの人の四十九日、忍びて比叡の法華堂にて、事削がず、装束より始めて、然るべきものども細かに、誦經などせさせ給ふ。經、佛の飾まで疎かならず。惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、になうしけり。御文の師にて睦まじく思す文章博士召して、願文作らせ給ふ。その人と無くて、哀れと思ひし人の果敢なき様になりたるを、阿彌陀佛に譲り聞ゆる由、哀れげに書き出で給へれば、博士「唯斯くながら、加ふべき事侍らざめり」と申

す。忍び給へれど、御涙も零れて、いみじく思したれば、博士「何人ならむ。その人とは聞えも無くて、斯う思し歎かす許りなりけむ、宿世の高さよ」と言ひけり。忍びて調ぜさせ給へりける装束の袴を取り寄せ給ひて、

泣く／＼も今日は我が結ふ下紐をいづれの世にか解けて見るべき

この程までは漂ふなるを、何れの道に定まりて赴くらむと、思ほし遣りつゝ、念誦をいと哀れにし給ふ。頭中將を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つ有様、聞かせまほしけれど、託言に懼ぢて打出で給はず。

かの夕顔の宿りには、何方にと思ひ惑へど、その儘にえ尋ね聞えず、右近だに訪づれねば、怪しと思ひ歎き合へり。確かならねど、氣はひは然ばかりにやと私語さしかば、惟光を託ちけれど、いと懸離れ、氣色なく言ひなして、なほ同じ如好き歩きければ、いと夢の心地して、若し受領の子

どものすき／＼しきが、頭の君に懼ぢ聞えて、やがて率て下りけるにやとぞ思ひ寄りける。

この家主ぞ、西の京の乳母の女なりける。三人その子はありて、右近は別人なりければ、思ひ隔てて御有様を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。右近將た、驚しく言ひ騒がれむを思ひて、君も今更に漏らさじと忍び給へば、若君の上をだにえ聞かず、淺ましく行方無くて過ぎ行く。君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひて又の夜、仄かにかの在りし院ながら、添ひたりし女の様も同じ様にて見えければ、荒れたりし所に住みけむ物の我に見入れけむ便りに、斯くなりぬる事と、思し出づるにもゆゝしくなむ。(夕顔の巻)

す。忍び給へれど、御涙も零れて、いみじく思したれば、博士「何人ならむ。その人とは聞えも無くて、斯う思し歎かす許りなりけむ、宿世の高さよ」と言ひけり。忍びて調せさせ給へりける装束の袴を取り寄せ給ひて、

泣くくも今日は我が結ふ下紐をいづれの世にか解けて見るべき

この程までは漂ふなるを、何れの道に定まりて赴くらむと、思ほし遣りつゝ、念誦をいと哀れにし給ふ。頭中將を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子の生ひ立つ有様、聞かせまほしけれど、託言に懼ぢて打出で給はず。

かの夕顔の宿りには、何方にと思ひ惑へど、その儘にえ尋ね聞えず、右近だに訪づれねば、怪しと思ひ歎き合へり。確かならねど、氣はひは然ばかりにやと私語きしかば、惟光を託ちけれど、いと懸離れ、氣色なく言ひなして、なほ同じ如好き歩きければ、いと夢の心地して、若し受領の子

どものすきくしきが、頭の君に懼ぢ聞えて、やがて率て下りけるにやとぞ思ひ寄りける。

この家主ぞ、西の京の乳母の女なりける。三人その子はありて、右近は別人なりければ、思ひ隔てて御有様を聞かせぬなりけりと泣き戀ひけり。右近將た、囂しく言ひ騒がれむを思ひて、君も今更に漏らさじと忍び給へば、若君の上をだにえ聞かず、淺ましく行方無くて過ぎ行く。君は夢にだに見ばやと思し渡るに、この法事し給ひて又の夜、仄かにかの在りし院ながら、添ひたりし女の様も同じ様にて見えければ、荒れたりし所に住みけむ物の我に見入れけむ便りに、斯くなりぬる事と、思し出づるにもゆゝしくなむ。(夕顔の巻)



昭和十五年四月十日印刷  
昭和十五年四月十三日發行



編者	慶應義塾大學
右代表者	高橋 龍雄
發行者	慶應義塾出版局
右代表者	西村 富三郎
印刷者	山城 龍雄
印刷所	愛生舎印刷所

東京市芝區田村町五ノ十二

終

